早稲田大学人間科学部

1997年度

講義要項

1997年度入学者用

SCHOOL OF HUMAN SCIENCES, WASEDA UNIVERSITY

1997年度　大学暦

入学式			1997年 4月 1日(火)
前期	授業開始		4月 2日(水)
	授業終了		7月19日(土)
	夏季休業	自	7月20日(日)
		至	9月15日(月)
後期	授業開始		9月16日(火)
	創立記念日		10月21日(火)
	冬季休業	自	12月17日(水)
		至	1998年 1月 7日(水)
	授業終了		2月 5日(木)
	春季休業	自	2月 6日(金)
		至	3月31日(火)
卒業式			3月25日(水)

※人間科学部の授業は、4月14日(月)開始となります。

目　　次

講　義　内　容

学　部　指　定　科　目 …… 1
（総合講座・情報処理）

学　科　指　定　科　目　人間基礎科学科 …… 3
（必修・選択科目）

人間健康科学科 …… 4

スポーツ科学科 …… 9

人間科学テーマ科目 …… 21

自由科目（外 国 語） …… 67

寄附講座（ 自 由 科 目 ） …… 69

メディアネットワークセンター設置科目（全学共通科目） …… 75

早稲田／オレゴン夏期プログラム …… 76

役　職　教　職　員　一　覧 …… 81

住　所　一　覧 …… 82

建　物・号　館　案　内 …… 92

構　内　案　内　図 …… 93

科目一覧（五十音順）

ア　アジア文化論 …… 50
医学心理学 …… 63
イスラム社会論 …… 50
遺　伝　学 …… 24
イメージ自己体験法 …… 37
医療人類学 …… 65
運　動　学 …… 60
運動処方論 …… 61
運動制御論 …… 61
衛　生　学 …… 62
映　像　論 …… 53
エゴアイデンティティ …… 36
エジプト文明論 …… 50
エルゴノミクス（応用） …… 29
エルゴノミクス（基礎） …… 29
演　　劇 …… 53
音　　楽 …… 52
カ　化　　学 …… 22
科　学　史 …… 51
感覚・イメージ分析 …… 9
環 境 芸 術 …… 54
環境行動分析 …… 5
環　境　史 …… 39
環境色彩論 …… 43
環境生理学 …… 43
観光レクリエーション論 …… 47
看　護　学 …… 45
学習とメディア …… 31
画 像 医 学 …… 64
学 校 保 健 …… 62

基礎栄養学 …… 61
基 礎 講 義 …… 4
救 急 医 学 …… 65
救急処置法 …… 65
教育環境論 …… 35
教 育 学 …… 34
教育心理学 …… 35
教育制度論 …… 34
教授学習過程論 …… 35
空間の心理学 …… 43
経 済 学 …… 33
憲 法 …… 46
芸 術 論 …… 51
言語・記号論 …… 30
現代都市・地域論Ａ（早稲田都市計画フォーラム寄附講座） …… 72
現代都市・地域論Ｂ（ 〃 ） …… 72
現代都市・地域論演習Ａ（ 〃 ） …… 73
現代都市・地域論演習Ｂ（ 〃 ） …… 73
公共政策論 …… 41
考 古 学 …… 48
公衆衛生学 …… 62
コーチング論 …… 18
行動学概論 …… 27
行動検査法 …… 6
行 動 療 法 …… 37
高齢社会論 …… 45
コミュニケーション論 …… 31
コミュニティースポーツ論 …… 56
サ 細胞組織学（本年度休講） …… 22
産業・職業社会学（本年度休講） …… 46
視覚言語論 …… 31
システム論（本年度休講） …… 30
自然人類学 …… 25
社会意識論 …… 41

社会開発論 …… 49
社会集団論 …… 40
社会心理学 …… 43
社会調査法 …… 58
社会調査論（本年度休講） …… 40
社会福祉論 …… 44
社会変動論 …… 40
宗　教　学 …… 49
集団過程分析 …… 8
生涯教育論 …… 44
生涯スポーツ論 …… 55
職場体育論 …… 47
進　化　学 …… 25
神経行動学 …… 26
心 身 医 学 …… 63
シンボルシステム論 …… 30
身体形態学（解剖学を含む） …… 59
心理学的測定法 …… 6
心理検査法 …… 6
ジェロントロジー《長寿社会の人間学》（高砂殿寄附講座） …… 70
ジェンダー論（本年度休講） …… 47
ジャーナリズム研究 …… 32
上級英語Ⅰ …… 67
上級英語Ⅱ（Advanced English ） …… 67
上級独語Ⅰ …… 67
上級独語Ⅱ …… 67
上級仏語Ⅰ …… 67
上級仏語Ⅱ …… 68
情報処理Ⅰ …… 2
情報処理Ⅱ …… 2
事例研究法 …… 7
人　口　学 …… 39
人体の構造 …… 58
数　　学 …… 22

スポーツ医学 …… 20
スポーツ栄養学 …… 59
スポーツ科学概論Ⅰ …… 9
スポーツ科学概論Ⅱ …… 10
スポーツ環境論 …… 56
スポーツ教育論 …… 56
スポーツ行政論 …… 57
スポーツ経営学 …… 19
スポーツ工学 …… 60
スポーツ産業論 …… 57
スポーツ史 …… 51
スポーツ社会学 …… 18
スポーツ心理学 …… 20
スポーツ情報論 …… 57
スポーツ生理学 …… 20
スポーツ文化論 …… 18
スポーツ法学 …… 18
スポーツ方法実習Ⅰ（体操） …… 10
スポーツ方法実習Ⅰ（陸上） …… 10
スポーツ方法実習Ⅰ（バレーボール） …… 11
スポーツ方法実習Ⅰ（バスケットボール）a …… 11
スポーツ方法実習Ⅰ（バスケットボール）b …… 11
スポーツ方法実習Ⅰ（バスケットボール）c …… 12
スポーツ方法実習Ⅰ（ラグビー） …… 12
スポーツ方法実習Ⅰ（サッカー） …… 12
スポーツ方法実習Ⅰ（柔道） …… 12
スポーツ方法実習Ⅰ（剣道） …… 13
スポーツ方法実習Ⅰ（ダンス） …… 13
スポーツ方法実習Ⅰ（ニュースポーツ） …… 13
スポーツ方法実習Ⅰ（筋力トレーニング） …… 14
スポーツ方法実習Ⅰ（器械運動） …… 14
スポーツ方法実習Ⅰ（器械運動） …… 14
スポーツ方法実習Ⅰ（水泳） …… 15
スポーツ方法実習Ⅰ（ソフトテニス） …… 15

スポーツ方法実習Ⅰ（テニス） …… 15
スポーツ方法実習Ⅰ（卓球） …… 15
スポーツ方法実習Ⅰ（バドミントン） …… 16
スポーツ方法実習Ⅰ（ソフトボール） …… 16
スポーツ方法実習Ⅰ（スキー） …… 16
スポーツ方法実習Ⅰ（スケート） …… 16
スポーツ方法実習Ⅰ（レスリング） …… 17
スポーツマーケティング論 …… 58
生　化　学 …… 24
性　教　育 …… 38
精 神 医 学 …… 64
精 神 医 学 …… 64
精神生理学 …… 26
精神保健概論 …… 63
政　治　学 …… 32
生態系科学 …… 39
生態心理学 …… 41
性の心理学 …… 38
性の生物学 …… 38
生物学概論 …… 22
セラピューティック・レクリエーション論 …… 46
生　理　学 …… 23
先　史　学 …… 48
総合講座・人間科学Ⅰ［欲望］ …… 1
総合講座・人間科学Ⅰ［死］ …… 1
総合講座・人間科学Ⅰ［道具］ …… 1
総合講座・人間科学Ⅰ［遊び］ …… 2
測定評価論 …… 17
組織心理学 …… 42
造形心理学（本年度休講） …… 31
タ　対人行動論 …… 42
体力トレーニング論 …… 17
哲　　学 …… 33
デザインの評価と分析 …… 7

統　計　学 …… 4
統 計 学Ⅰ …… 4
統 計 学Ⅱ …… 5
東洋医学の人間科学（井深　大寄附講座） …… 70
都市社会学 …… 40
動機づけ理論 …… 28
動物生態学 …… 39
ナ　内　分　泌　学 …… 23
日本民俗学 …… 48
人間関係論 …… 42
人間基礎科学ⅠA …… 3
人間基礎科学ⅡB …… 3
人間基礎科学実習 …… 4
人間機能の計測 …… 5
人間行動と環境 …… 28
認知行動理論 …… 36
認知心理学 …… 28
脳神経科学 …… 26
ハ　発生生物学 …… 23
発達行動学 …… 27
発達心理学 …… 36
バイオエシックス …… 34
バイオメカニクス …… 19
比較行動学 …… 27
比較福祉論（本年度休講） …… 44
比較文化論 …… 49
非言語行動論 …… 28
表　現　史 …… 52
ビジュアルイメージ・音響分析 …… 7
美　術　史 …… 52
Human Science Today［オリンピック］ …… 21
Human Science Today［現代の宗教］ …… 21
Human Science Today［子どもと現在］（本年度休講） …… 21
Human Science Today［臓器移植］ …… 21

フィールドワーク論 …… 8
フィールドワーク論 …… 8
福祉原論 …… 44
物理学 …… 22
舞踊論 …… 53
武道文化論 …… 51
武道論 …… 54
文化心理学 …… 47
文化人類学 …… 49
文学 …… 51
分子細胞生物学 …… 24
プロトコル分析 …… 7
法学 …… 46
放射能生物学 …… 25
放射能生物学実習 …… 25
保健社会学 …… 65
マ　マスメディア論（本年度休講） …… 31
民族スポーツ調査法 …… 58
免疫学 …… 23
メンタルトレーニング論 …… 59
ヤ　薬理学 …… 24
遊戯論 …… 54
ヨーロッパ文化論（本年度休講） …… 51
余暇論 …… 46
ラ　ライフコース論（本年度休講） …… 35
リハビリテーション …… 46
臨床心理学 …… 37
臨床スポーツ医学 …… 65
臨床と文化（本年度休講） …… 47
倫理学 …… 33
老年心理学 …… 45

学 部 指 定 科 目

総合講座・人間科学 Ⅰ［欲望］ 門 前 進 他

人間にとっての大きなテーマ、「欲望」について複数の領域から、複数の教員が一回、ないし二回の講義を担当する形で進めていく。以下、細かいタイトルと担当教員の名前を書いていく。

「生物学から見た欲望、食について」〔山内兄人〕
「生物学から見た欲望、性欲について」〔小室輝昌〕
「臨床心理学から見た欲望」〔門前進〕
「欲望のバイオエシックス」〔木村利人〕
「スポーツと欲望」〔寒川恒夫〕
「文化人類学から見た欲望」〔蔵持不三也〕
「考古学から見た欲望」〔谷川章雄〕
「環境と欲望」〔佐古順彦〕

総合講座・人間科学 Ⅰ［死］ 濱 口 晴 彦 他

アインシュタインは「死とは何か」と問われて、「モーツアルトを聴けなくなることだ」と答えたそうだが、死を事実としての死のみならず、象徴としての死としてもとらえているところが興味深い。

人生は不確実性に満ちているが、そのような中にあって唯一確実なことは死であるといわれる。こうした出生から死に至るプロセスとその終焉について社会学（濱口晴彦）、公衆衛生（町田和彦）、生物学（吉岡亨）、文学（重原淳郎）、介護看護（堺園子）、という知の体系と実践によって死の多義性に迫ってみたい。

総合講座・人間科学 Ⅰ［道具］ 谷 川 章 雄 他

道具は人間にとって不可欠なものである。人類が誕生して以来現在にいたるまで人間は道具とともにあり、人間の未来も道具と無縁ではありえない。したがって、人間と道具の関係を考えることは、人間に関わる重要な課題のひとつであろう。

本講義では、人間と道具をめぐる問題を霊長類学・考古学・心理学・人間工学などの多角的視点からとりあげる。すなわち、過去から現在、そして未来の人間と道具をめぐる多面的、重層的な世界を明らかにすることが本講義のねらいである。

総合講座・人間科学 I ［遊び］ 寒川恒夫他

人間の存在は、それ自身が遊びである。この命題はプラトン以来ヨーロッパの知的伝統をつらぬくものであるが、遊びは、あまりに身近かであまりにとらえどころがない故に、かえってそれ故に多くの研究者の関心をひきつけてきた。本講座では人間科学の立場から以下の内容をもって「遊び」理解にアプローチする。

遊戯論の世界（寒川恒夫）
脳から見た遊びの性差（山内兄人）
脳内麻薬物質（柴田重信）
人間と動物の遊び（根ヶ山光一）
深層心理と遊び（門前進）
文化と遊び（蔵持不三也）
イギリス文学にみる真面目と不真面目（田中純蔵）

情報処理 I 西村昭治
山田豊明

インターネットを有効活用する為に必要な基礎知識、基本技術を以下の課題を通して習得することを目標とする。

Ⅰ. 電子メールによる情報交換
Ⅱ. 電子ニュースによる情報交換
Ⅲ. WWWブラウザによる情報検索

情報処理 II 西村昭治

情報処理を受講する際に必要な、コンピュータハードウェア及びソフトウェアに関する基礎知識の習得を目標とする。

学習内容のレベルは、通産省認定第二種情報処理技術者試験合格レベルとする。

学 科 指 定 科 目

（人間基礎科学科　必修科目 ）

人間基礎科学 Ｉ Ａ

［前期］　　飯野徹雄、木村一郎、小室輝昌、柴田重信、森川靖、山内兄人、吉岡亨

人間は霊長類ヒト科の動物としての側面を持つ生物の一員であり、人間あるいは人間科学を正しく理解するためには生物学的知識の把握が必須である。この科目では、生物学各分野の基本的事項について概説し、自然界における一生命体としてのヒトについて理解できるよう、生物系教員全員で講義を進める。

［後期］　　濱口晴彦

たとえば、次のような問題を社会学的に考えるとはどういうことかについて講義する。「専門部の方は何だ？／社会学だ／どうだ？／おれは５分間で出て来た／答案は出さんのか／ふふん／夏村は暑そうに上着の襟をひろげて風を入れながら／―夫婦とは何ぞや、という問題じゃ、社会学の時間には一ぺんも出とらんからな、いくら考えてもわからん、こいつは大隈に会うよりよっぽど難しいぞ／何と書いた／書きようがあるか、青成―お前わかるか／おれはわからん／おれにもわからん―何じゃ、一体夫婦とは？／男女の関係だな／…／それが社会学の答案になるか／（尾崎士郎 『人生劇場』 より）ならぬかを考えてみよう。　　テクスト：『社会学講義』（早大出版部）

人間基礎科学 Ｉ Ｂ

〔前期〕　根建金男

心理学の基礎知識を学ぶための心理学入門である。具体的には、パーソナリティ、知能、睡眠と脳波、こころの病、心理療法の新しい動向などをとりあげる。

これらのテーマについて学びつつ、同時に方法論を含めた心理学の特徴についても理解できるような内容にしたい。受講者が、心理学を日常生活に少しでも生かせるようになれば幸いである。

講義は、テキスト、資料の他に、ビデオを利用して、できるだけわかり易くなるように工夫したい。

利用するテキスト：根建金男編著　「心理学セミナー」鷹書房

〔後期〕　堀田郷弘、重原淳郎、吉村作治、蔵持不三也、寒川恒夫

学問の分野として、人文科学、社会科学、自然科学という分け方があります。人間科学

はその３分野を総合しようとするものですが、この講座では、総合的な人間科学における人文科学とは何かを、人文科学に属する学問とされる文学、哲学、芸術、文化などの立場から講義します。

人間基礎科学実習　　青柳肇、飯野徹雄、臼井恒夫、木村一郎、小室輝昌、嵯峨座晴夫、柴田重信、鈴木晶夫、根ケ山光一、根建金男、濱口晴彦、宮崎清孝、森川靖、山内兄人、矢野敬生、吉岡亨

人間理解の基礎となる生物学、心理行動学及び社会学の基本的実験及び調査の技術や思考方法の習得を目的としている。学生は３班に分かれ、各学系につき７回、計21回の基礎的実習を行う。詳細はオリエンテーションの際に説明する。

統　計　学　　嵯峨座　晴　夫（前期）
中　川　　清（後期）

この科目は、人間基礎科学科１年配当の必修科目（４単位）である。ここでは、統計学がいずれの科学にも適用可能なデータの数量的な解析手法の体系であるという考えに立って、次のような項目について講述する。全体は大きく記述統計（前期）と推測統計（後期）からなっており、記述統計では、統計学の歴史、統計調査の方法、分布、代表値、関係の分析、時系列の分析を扱う。推測統計では、確率と確率分布について初歩的な説明をしたあと、標本理論、推定、検定、多変量解析などの手法について実例をあげて説明する。

（人間健康科学科　必修科目）

基　礎　講　義　　野　嶋　栄一郎　他

1）　人間健康科学科を構成する各教員が個々の専門性に照らし、人間科学あるいは人間健康科学とどのようにかかわっているか、自己紹介を含め、解説する。

2）　また、この時間は、学生にとって、大学生活に必要な情報を得る好期でもある。オリエンテーションのためのプログラムや、ＯＢからの学部案内のプログラム等も用意されている。

統　計　学Ⅰ　　岩　坪　秀　一

統計学を、人間行動のための（少々おおげさにいえば生きていくための）認識、判断、意思決定などの方法論の一つとしてとらえなおし、その基礎を明らかにすることを目指し

ていきたい。数式についても、なぜそのような定式化をするのかに重点を置きたいと思う。つまり、知識としての統計学講義に陥らないようにしたい。統計Ｉでは、まず、統計的な基本概念（誤差、有効数字、平均、分散、相関係数、分布、サンプリングなど）を歴史的にたどりつつ、その本質的な意味を理解していただきたい。

統　計　学 II　　岩　坪　秀　一

統計を踏まえて、統計学がどのような場面で力を発揮するか、またどのような限界があるかを、人間に関係する分野への具体的な適用例を上げながら検討していく。新カリキュラムへ積極的に取り組まれている野嶋栄一郎教授の姿勢に大いに共鳴して、本講義を担当させていただいたものの、今や責任の重大さをひしひしと感じている。人間科学部の諸君のために出来るかぎりの努力をしたいので、一つ一つの講義に対する諸君からの積極的批判をおおいに歓迎したい。

（ 人間健康科学科　選択科目 ）

環境行動分析　　谷　川　章　雄
佐　古　順　彦

前半は、人間と環境・景観の関係、人間の姿やしぐさ・行動などを歴史的・文化的に解読する方法を実習する。具体的には、都市や村落の景観と環境を考古学的・民俗学的に分析する方法、絵図・絵巻物の解読法、今和次郎による考現学の方法などをとりあげ、それらの方法の意味を考える。

後半は、人と環境の相互交流（トランザクション、transaction）の研究法をいくつか実践する。例えば、「環境を体験する」ことで感覚や知覚を言語化する。「場所を利用する」ことを記述して生活行動のパタン化を知る。「場所をマップする」ことで空間の計量化を行う。いずれも環境を「意識的に」（普段とは異なる状態で）経験することを分析する手法である。

人間機能の計測　　石　田　敏　郎
宮　崎　正　己

人間の生体機能を計測し、理解することは筋作業、心的作業などからの生体負担を検討・評価する際に不可欠である。筋作業に対しては筋電図、呼吸、エネルギー代謝、心泊数、神経的・心的作業に対しては眼球運動、手掌皮膚抵抗値、脳波などの生理的測定法が主に

用いられる。本実習では、これらの測定法とその分析・評価法を、実際の作業状況を模した場面で実施し、パフォーマンスとの関連を検討する。

心理学的測定法　　野　嶋　栄一郎
　　齋　藤　美　穂

ここでは以下のような心理学的測定法の基礎的な理論と方法を学習する。

1）定数測定法
　　重さの弁別閾の測定
2）尺度構成法
　　2、1）感覚尺度の構成
　　マグニチュード推定法、カテゴリー評定法の利用
　　2、2）態度尺度の構成
　　物理量の裏づけのない測定
　　質問項目の作成
3）テストの信頼性と妥当性
　　信頼性、妥当性の概念と検討

心 理 検 査 法　　上　里　一　郎
　　菅　野　　純

心理検査といっても一つではなく、さまざまな検査が開発され広く活用されている。この講義では、その中から代表的なものとして、知能（発達）検査と性格検査をとりあげ、その理論・方法・効用と限界・臨床例などについて講義する。

また、いくつかの検査は実際に自分や他者に実施してそれを整理し解釈してまとめ、レポートを提出するという方式でおこなう。

具体的な内容は以下のとおりである。

（1）心理検査法総論(1)(2)(3)(4)、（2）精神発達検査（乳幼児精神発達検査）、（3）言語発達検査（ＩＴＰＡ）、（4）知能検査（ＷＩＳＣ－Ｒ、ビネー式知能診断検査、集団知能検査）、（5）質問紙性格検査（矢田部ギルホード性格検査、ＣＭＩ、ＭＭＰＩ）、（6）作業検査（内田クレペリン精神作業検査）、（7）投映法（ロールシャッハテスト、文章完成法－ＳＣＴ－、ＰＦスタディ）

行 動 検 査 法　　坂　野　雄　二
　　上　里　一　郎

臨床心理学的査定の方法論としての行動検査法の実際を学ぶ。具体的には、

1．治療計画の立て方
2．行動観察法
3．情動の生理学的測定法方法
4．行動・態度評定法
5．その他
について概説を行うとともに、その具体的方法論について実習を行う。

事例研究法　　坂野雄二
木村利人

臨床心理学、およびバイオエシックスの観点から事例研究を行う。
1．　さまざまな精神疾患や心理学的問題の診断基準、治療仮説の立て方、治療技法の選択、治療効果の判定等について、臨床心理学の観点から事例検討を行い、事例を通して臨床心理学的査定と介入の実際を学ぶ。
2．生命の始め・生命の質・生命の終わりをめぐっての臨床医学的事例にバイオエシックスの視座からアプローチし、分析することにより「事例」と「方法論」の持つ多様な意義を解明する。基礎的学習文献は主として外国語。

プロトコル分析　　佐古順彦
石田敏郎

プロトコル（protocol）とは、一般には、「議定書」であり手続きの公式的なコードであったり、交渉の結果の議事録である。哲学的には事象を客観的に記録した言明である。心理学では「発話データ」のことをいうが、「発声のことば」結局「書きことば」に変換して分析される。「声に出して考える（thinking aloud）」課題が思考心理学で用いられた典型例である。具体例でプロトコル分析を体験する。

デザインの評価と分析　　齋藤美穂
野嶋栄一郎

この授業では、評価対象に絵画・人物・景観・プロダクトデザイン等を用いてこれら及び造形物の構成要素である形態・色彩・材質の特性を評価する方法を学習する。具体的には一対比較法・ＳＤ法・系列カテゴリー法について、それぞれの手法とそれらを取りまく理論や分析方法を学ぶ。

ビジュアルイメージ・音響分析　　野呂影勇

―映像・サウンドクリエーティングからリハビリテーションに至る様々な工学的アプロー

チ、ビジュアルイメージと音響についての表示法と分析法について、解説する。具体例として、多様な分野を取り上げる。

講義内容

前半　基礎編

生体情報解析の方法から映像・サウンドクリエータまで、多様な分野での基礎知識・情報を講義する。

後半　応用編

1．映像・サウンドクリエーティングのための方法、ディスプレイと表現技法

2．リハビリテーション工学への応用

集団過程分析　　門前　進　吉村　正

前半は門前が担当し、後半は吉村が担当する。前半の門前の担当部分は、まず、ゲームか何かを通して、データを収集し、それの分析を行っていく。データの分析方法には、さまざまな観点があるが、それらのうち、いくつかの観点を選び出し、それについて分析をしていく。これらの方法は、マニュアルを作成するので、それにのっとって、受講生がいくつかのグループに分かれ、分析を行っていく。そして、その結果が出たら、それに考察を加え、最後の段階で、各グループに発表をしてもらう。

後半の吉村の担当部分では、簡易スポーツを実際に行い、その記録やデーターを収集し、それらを分析する。また、そこでは、リーダーシップ、フォロアーの役割と養成集団のマネージメント、チームワーク等についても学習する。

フィールドワーク論 I　　谷川章雄　蔵持不三也

前半は、考古学・歴史学の基本的な方法をとりあげる。具体的には、考古学における遺物の観察・記載の方法とその資料操作である型式学、歴史学の文献史料の扱い方を実習し、その意味を考える。

後半は、文化人類学の基礎的作業としてのフィールド・ワークの方法や意味を紹介し、異文化を見る知の在り方を考察する。

フィールドワーク論 II　　吉村　正　店田廣文

本講義は、前半を吉村正、後半を店田廣文が担当する。

（前半）フィールドワークの重要性やその実際を紹介し、講義する。更に受講生には、

講義期間中に最低一度は、病院、福祉施設、リハビリテーションセンター、スポーツクラブ等でのフィールドワークの体験とレポート提出を義務づける。そのレポートを「スポーツと健康づくり」の視点から分析し、講義する。

（後半）特定の社会現象を解明するために定められたデーター収集とその分析の方法である社会調査法の基本的な考え方と技法を紹介する。取り上げる課題は、（1）目的と全体の流れ、（2）標本調査と標本抽出、（3）質問文と調査票の作成、（4）実査と結果の分析を予定している。各人が調査を企画できるようにすることがねらいである。

感覚・イメージ分析　　門前　進
蔵持　不三也

人間のイメージ表現がどのように始まったか、つまり始源の造形を、特にフランスの先史考古学者ルロワ＝グーランの研究を紹介しながら考察する。スライド使用。

（ スポーツ科学科　必修科目 ）

スポーツ科学概論 I　　宮城　淳
佐々木　秀　幸
日比野　弘
太田　冨貴雄
町田　和　彦

スポーツ科学科では、「スポーツ」を対象として、その概念や研究法を学習することを一つの目的としている。

そこでここでは、競技スポーツ、生涯スポーツおよび健康スポーツの観点から、時宜に適ったトピック・動向などを論説することによって、「スポーツ」に対する興味ならびに問題意識を喚起するとともに、「スポーツ観」を整理・統合して、その後の科学研究（スポーツ科学概論、演習、卒論）ならびにスポーツ技術体系（スポーツ技術論、方法実習、特論）へ導入するためのガイダンス的な役割を果たすこととする。

本年度の講義内容（担当者）は、①ポスト伊達を生み続けるための要件（宮城）、②アトランタオリンピックを振り返る（佐々木）、③早稲田ラグビーと世界のラグビー（日比野）、④生涯・健康（保健）スポーツ論（町田、太田冨）からなっている。

スポーツ科学概論　II　　寒川恒夫
佐々木秀幸
村岡　功
中村好男
竹中晃二

スポーツ科学の学習・研究を進めるにあたっては、その研究の基本的方法を習得することが必要であるが、同時に具体的な問題（課題）を解決するためにはどのような個別の方法論をとるべきかということを判断し得る視点が不可欠である。

そこで、ここでは、スポーツに関する様々な科学研究に共通する基本的な方法論を解説することによって、スポーツ科学研究法の原理を習得させるとともに、スポーツ本来のあり方を探り、そして「スポーツ科学」自体を対象としたスポーツ科学論を展開することによって、「スポーツ科学概論 I 」で喚起された各自の問題意識を2年次以降の演習へと結び付ける役割を果たす，講義の内容（担当者）は、①アンチ・ドーピング（寒川、佐々木、村岡）、②スポーツと科学（中村）、③スポーツ科学の研究法（竹中）、④演習概要の解説からなっている。

（ スポーツ科学科　選択科目 ）

スポーツ方法実習　I（体操）　　土屋　純
太田　章

学校体育の７運動領域の一つで、必修となっている体操の実技を行う。ここでいう体操とは、学習指導要領にある通り以下の運動を指す。

ア．　身体の柔らかさ及び巧みな動きを高めるための運動
イ．　力強い動きを高める運動
ウ．　動きを持続する能力を高める運動

前期は太田が主として上記のイ、ウに関連する運動を、後期は土屋が主として上記のアに関連する運動の具体例を紹介し、実習する。

スポーツ方法実習　I（陸上）　　佐々木　秀　幸

陸上競技の基本技術を主として習得する。科学的知識を応用して競技力の向上を体験していく。これらの実習をとおして、将来スポーツ指導者として活用できるトレーニング法、コーチング法を現場で習得する。

スポーツ方法実習 Ⅰ（バレーボール） 矢 島 忠 明

バレーボールは、学校体育の教材ならびに部活の一つとして重要な役割を果たしている。と同時に社会スポーツ、職場スポーツとしても広く愛好されている。さらにまた、国内・外ともに、ポピュラーな競技スポーツとしても目ざましい進展を遂げている。このようにバレーボールが幅広く活用されてきているのは、総合的な体力を高めながら、ボールコントロール、ボディーコントロールなどの能力を高めて、チームプレーに還元するコミュニケーションスポーツの役割を果たしているからである。

本授業では、理論的な裏づけを基に、基本動作及び技術を確実に身につけると同時に、バレーボールの効果的な指導の手順、方法を修得し、加えてルール、審判をはじめとして試合の運営等について学習する。

〔テキスト〕：西村書店発行の『ボールゲームバレーボール』を使用する。

スポーツ方法実習 Ⅰ（バスケットボール） a 五 三 健

バスケットボールの技術構造を理解しながら、ゲームに必要な基本技能（特にいろいろなショット）および技術、応用技術等を確実に修得することを目指す。

この講座では、最初基本的なショットを学習する。次に集団技能を中心に展開し、その様相から課題を見付け出すことにより個人的技能の向上を計り、ゲームに連結させて行く。同時に、理論的な裏付けを基に、将来役立つバスケットボールの効果的な指導法を身につけるようにする。

理論の実践を中心に実技指導を行うが、学校体育の教材やクラブ活動の一つとして、主要な役割を果たしているバスケットボールの楽しさや教育的価値、歴史・ルール・ゲームの進め方などについても、ビデオを併用して講義する。

なお、教育実習予定者は3年時までに履修することが望ましい。

スポーツ方法実習 Ⅰ（バスケットボール） b 五 三 健

この講座は女子だけのクラスである。

バスケットボールの技能は、対人動作が基本となる。

男子と女子では、身長や筋力などの差によって、スピードやジャンプ力、ショットの距離、パスの強さ、ドリブルの速さ、攻防の激しさなどに大きな差がある。

男女のミスマッチによる身体事故を防止し、授業の安全を期すだけでなく、女子の恐怖心や男子の遠慮などによる、互いの技能習得の遅れを排除することを目的として、この女子クラスを設けている。

授業の内容は、スポーツ方法実習 Ⅰ（バスケットボール）aと同じである。

スポーツ方法実習 Ⅰ（バスケットボール） c　　伊　藤　順　藏

バスケットバールは、鋭さ・コントロール・バランス・リズム・タイミング・ハーモニーなどが大切な要素であるとともに、逆をとること・先手をとること・連続性などが欠かせない奥の深いスポーツである。この実習では、経験や技術の修得者を前提としないが、それぞれのレベル・立場で、自分の能力をひきだす努力をしながら、チームの構成メンバーとして、バスケットボールの楽しさを体験して貰うつもりである。

実習内容は基礎技術（パス・ショット・ドリブル・ディフェンスなど）をさまざまなスキルでその技術を修得したのち、コンビネーション・プレーやチームプレーに発展させたい。そして試合の流れの中で、自分を生かすとともにチームスポーツのよさを体験して貰いたい。同時に理論的にも裏づけて、バスケットボールの指導法の修得も心がけたい。

スポーツ方法実習 Ⅰ（ラグビー）　　日比野　　弘

ラグビーはチームスポーツである。15人のメンバー全員が、ルールと攻防理論を熟知し、自らの役割をまっとうしたときに、勝利の喜びを味わうことができる。

この講座では、ラグビーの基礎知識と、将来役立つ指導法を身につけることを目的とする。

経験の有無、技術の上手、下手にかかわらず、スキルの向上を目指すもの、レフリー、コーチを志望するもの、教員としてラグビー経験をとり入れようとするものなど、巾広い層に受講してほしい。女子の参加も大歓迎である。

理論の実践を中心に実技指導を行うが、雨天の際には、ラグビーの歴史、戦術論、ルール解説、ゲーム分析など、ビデオを併用して講義する。

（初回はオリエンテーション。筆記用具持参）

スポーツ方法実習 Ⅰ（サッカー）　　安　田　一　男

本授業においては、サッカーを行う上で不可欠な技術、戦術、体力の三つの要素を個々に分析し、その内容、能力の高め方、相互の関連性についての理解を深める。また、それをプレーとして表現できるように実技を行っていく。

さらに、サッカーのルールや試合の進め方、歴史と現状、スポーツの中でのサッカーの位置づけ、サッカーの教育的価値などについての講義も合わせて行う。

スポーツ方法実習 Ⅰ（柔道）　　小野沢　弘　史

柔術から発展した柔道は、日本民族が生んだ世界に誇るべきスポーツ文化である。

柔道の特性をふまえ、基礎的・応用的技能の体得と、楽しく意欲的で、かつ個人差（技能、体力、経験、性）に応じた安全な練習法、指導法の習得を目指す。さらに、柔道の技術構

造、ルール、審判法などを学びながら、柔道の根源を追求してその背景を求める。

スポーツ方法実習 Ⅰ（剣道） 安藤宏三

竹刀を媒体とした打つ、突く、捌く等の対人攻防技能の習得を通して剣道の理解を深める。

男女共に初心者は基礎から導入し、簡易な試合や審判ができるよう指導する。

準備するもの（第1週目に説明するので必ず出席すること。）

・服装：剣道着、袴またはトレーニングウェア上下（長袖、長ズボン）

・テキスト：安藤宏三著 『目で見る剣道上達法』（成美堂出版）

・その他：手拭、名札、竹刀

スポーツ方法実習 Ⅰ（ダンス） 杉山千鶴

1年間を通じ、踊る・創る・観るの3つの側面から、ダンスをトータルに体験する。ダンスとは、自由で、創造性と独創性を追求する表現である。授業では、表現手段となる、“踊る身体”づくりを行う。①身体各部のストレッチにより柔軟性を高め、自己の身体を細部に至るまで認識する。②基本ステップの練習により、舞踊言語の基礎を覚え、①の認識に基づくボディ・コントロールを習得する。③小品を経験し、基本に囚われない様々な動きを知り舞踊の語彙を増すと共に、リズム感と運動感を養い、同時に舞台空間・劇場空間の把握も覚え、作品を踊る・表現することも学ぶ。

更に、クリエイティブな活動として、自己の舞踊言語を駆使し、各人の感性によって、固定観念に束縛されない独創性あふれる作品をまとめ、発表する他、舞踊公演（プロ・アマ、ジャンル不問）を直に鑑賞する。

スポーツ方法実習 Ⅰ（ニュースポーツ） 竹中晃二

本スポーツ方法論・実習は、ニュースポーツ種目を単に紹介するだけではない。現代社会におけるスポーツ活動の意義を、その心理・生理的効果を確認し、それぞれのライフ・スパンに応じた身体運動・スポーツ活動の内容を論議しながら、人々にスポーツをどのように提供していくかを考える機会としたい。実際には、論議と実技、そしてグループワークを絡めた授業を展開する。そのため、授業で行う実技内容は、グランドゴルフ、ペタンク、フリスビー、アルティメット、ソフトバレーボール、カバディなどのニュースポーツ種目の他に、ジョギングやウォーキングの方法など幅広く行う。

評価は、グループワークおよびそのレポートの内容によって決定される。もちろんグループワークを行うために、授業に出席することがその前提である。1時限に設定された本授業に遅刻・欠席する可能性の高い学生やレポート作成に不熱心な学生は履修を御遠慮願い

たい。

スポーツ方法実習 Ⅰ（筋力トレーニング） 岡 田 純 一

筋力トレーニングはスポーツ選手の補強運動、リハビリテーションあるいは中高年者の健康の維持増進など様々な場面で活用されている。本実習では基礎的なトレーニング種目の理解と実践、またそれらを活用した、様々なトレーニングプログラムを実習する。

主な内容として、

1． 基礎トレーニング種目の習得

フリーウエイトトレーニング（クイックリフトを含む)、マシントレーニング。

2． 目的別トレーニングプログラム

サーキットトレーニングほか、各種トレーニングシステム

スポーツ方法実習 Ⅰ（器械運動） 土 屋 純

学校体育の７運動領域の一つである器械運動を取り扱う。

具体的には以下の４つの運動についてそれぞれ課題となる「技」を設定し、技能の修得・習熟をはかる。

1． マット運動

2． 鉄棒運動

3． 平均台運動

4． 跳び箱運動

各運動で課題とする技は講義のなかで指示する。

スポーツ方法実習 Ⅰ（器械運動） 船 戸 徳 郎

学校体育において必修の一つである「器械運動」領域の理論と実技を行う。

この授業は、個人スポーツの特性を生かし個々の能力に応じた運動技術の習得、習熟を目指し、その体験学習の過程でスポーツの本質である喜びや楽しさを理解しながら個々の持つ課題を解決できるよう指導する。

同時に学習者側の立場のみではなく指導者側の立場にたって、その指導法の理論と実習も行う予定である。

具体的には以下の種目を扱う

1． マット運動

2． 跳び箱運動

3． 鉄棒運動

スポーツ方法実習 Ⅰ（水泳） 矢 野 正 次

水中運動の一つである水泳は、夏季の限られた期間に屋外で実施される運動種目であった。

今日では、屋内プールの普及によって年間を通して行える運動種目になっている。年令、性別に関係なく、またハンデキャッパーでも、医師等の指示によって実施が可能である。当科目では、各自の水泳能力を高めることは勿論、水泳に対する知識を学び以後の活動に役立てることを期している。

スポーツ方法実習 Ⅰ（ソフトテニス） 林 敏 弘

ソフトテニス（100年余にわたって軟式テニスと呼ばれてきた大衆スポーツが国際普及の進展でソフトテニスと名称変更した）は、軽いゴムボールを使用して行う、ダブルスが主体（シングルスもある）のスポーツである。

本授業では、基礎技術としてのグランドストローク、ボレー、スマッシュ、サービスを練習した後、試合を多く経験してもらう。

試合は国際競技規則をベースにして行うが、長い歴史を持つ日本競技規則での試合もあわせて理解し、体験してもらう。

どちらのルールでの試合においても、ソフトテニスの基本であるダブルスのコンビネーションプレーを主体的に修得してもらう。

スポーツ方法実習 Ⅰ（テニス） 宮 城 淳

近年、社会的な要請として積極的に『やるスポーツ』の必要性が高まり、誰もが生涯を通じて楽しめるスポーツを身につけることが望まれている。テニスは老若男女を問わず、しかも国際性豊かな競技であり、これらの要請に応えるスポーツとして最適であり、この授業ではテニスを通じて人間資質を高めることを目的とする。内容としては基礎実技のマスター、ストローク理論、マナー、ルール、審判法、及び戦略理論の修得を目標とする。

スポーツ方法実習 Ⅰ（卓球） 葛 西 順 一

卓球は、長さ274cmの卓球台に２人あるいは４人のプレーヤーが対峙して、初速が126km／hに及ぶボールを打ち合って勝敗を争う競技である。また、ボールがセルロイド製で質量が小さいため（重要は約2.4g）、ラバーの摩擦によって種々のスピン（トップ・バック・サイド）が生じる競技特性がある。すなわち、卓球はきわめて短い時間のなかで、スピードとスピンに対応しなければならない競技特性をもっている。

卓球競技で最も重要なポイントは、相手の打球直前までの様々な情報を認知した上で、相手の打球のスピード、スピン、打球方向を予測し、打球のための最適な位置と姿勢をと

ることにある。

本実習では、卓球のゲームを構成する基本的な公式ルールと技術、サービス、レシーブ、フットワーク、指導方法等をマスターすることを目標として、生涯を通じてプレー可能な自分流のスタイルを確立してもらう。

スポーツ方法実習 Ⅰ（バドミントン） 関　一誠

競技バドミントンは、1対1、2対2で行われるスポーツで、個々の技術、体力、戦法がトータルで成されなければならない。これらの要素について科学的に分析・解明し、競技力の向上を計る。

また、バドミントンの身体運動理論、歴史、ルール、指導用語、審判法、マナー等々を学び、コーチング論を確立してもらう。

スポーツ方法実習 Ⅰ（ソフトボール） 吉村　正

平成4、5、6年から、ソフトボールは、小学校（5、6年）、中学校、高等学校で選択必須になった。これは、サッカーとともに、学校体育の球技の中で最も重要視されている証である。

生涯スポーツとしてのソフトボールも、総理府の調べで分かるように、過去10年間、バレーボールや軟式野球を抜いて、日本1の競技人口を誇っている。このように、ソフトボールは、学校体育のみならず、社会体育の場でも、広くプレーされているのである。

本授業では、小・中・高ではどのようなソフトボールを、正課体育や課外活動の場で教えるべきか、また生涯スポーツとしてのソフトボールはどうあるべきかなどを学習する。

〔参考書〕：吉村正著 『現代ソフトボールの戦法』 全4巻（ベースボール・マガジン社）

スポーツ方法実習 Ⅰ（スキー） 佐藤千春

この授業においては、スキーについて何でも知っているということ、すなわち、知るということと、良く滑れるということを目指したい。しかし、そうは言っても時間には限りがある。従って、いわゆるスキーに関する基礎的な部分を大事にして、その部分から進めることができるところまで、積極的に授業を進めたい。後期9月になってから毎週1コマずつ授業を行い、雪が降ったならば3泊4日の雪上の集中授業を行う。後期併合型の授業ということである。この授業に関しては、掲示によって、いろいろな伝達を行なうから、その点十分に注意するよう望みたい。

スポーツ方法実習 Ⅰ（スケート） 伊藤順蔵

期間　12月7日（水）から12月22日（月）

教場　日光スケートセンター

説明会　11月中旬に実施予定。掲示で日時を知らせます。

スケート経験歴と、スケート技術を基準にして、初心者から上級者までのグループに班別して行う。

実習する基礎技術は、フォワードスケーティング、スカーリング、スネーク、クロッシング、バックワードスケーティング、ストップ、ターンなどであるが、それらの技術が確実に行えるようになったら、フィギュア・ホッケー・スピードにチャレンジしたい。

スケート靴は、上達・安全面のうえから、自分の靴を持って欲しい。なお、宿舎の確保や貸し切りリンクのために必らず参加する人が選択して欲しい。

スポーツ方法実習 I（レスリング）　　太田　章

本授業は、アマチュアレスリング競技について、特に初心者、女子にもわかりやすくその方法を指導し、フリースタイル及びグレコローマンスタイルの理論及び実技を行う。

体力トレーニング論　　加藤清忠

スポーツトレーニングに対する考え方やその中での体力トレーニングの重要性の概念的な理解を基に、その背景となっている第二次大戦後各国において取り組まれてきた体力・健康つくり運動とともに、オリンピックの発展に寄与してきた各種トレーニング法の歴史的背景や問題点を明らかにしていく。そして重要な一般的トレーニング法についてはその具体的内容について解説する。また、トレーニングの原則やトレーニング計画といった基本的問題や、競技スポーツのレベルの向上に伴って生じてきたトレーニング倫理の問題についても言及したい。参考書：「マスル・トレーニング」（西村書店）

測定評価論　　永田　晟
上田雅夫

現代において、運動・スポーツを指導する者に要求されることは、科学的に裏付けられた指導法である。そのためには、指導者はさまざまな問題点を客観的に測定評価することが不可欠となろう。

ここでは、前半を永田が分担し、統計法、資料収集の方法、論文や報告の書き方について指導をし、後半は上田が分担し、質問紙やテストの作成法ならびに心理学的アセスメントについて指導をおこなう。

参考文献などはそのつど指示する。

コーチング論　（A）佐々木　秀　幸
（B）日比野　　弘

スポーツにおけるコーチングの基礎理論とその応用について、Aでは個人的スポーツを、Bでは集団的スポーツを対象にして、具体例をあげながら解説する。

主に次のような内容をとりあげる予定である。

1．　コーチングシステム
2．　体力と技術の相互関係
3．　指導者に必要な観察力
4．　トレーニング計画とトレーニング管理
5．　勝敗を決定する要因
6．　その他、競技力向上のためのコーチング諸問題

スポーツ社会学　宮　内　孝　知

スポーツは現代社会において極めて大きな、かつ、重要な意味を持つ社会現象である。それは一つの文化として大きな勢力を持っているばかりでなく、政治や経済、教育などと密接に関係し、そこに社会学的理解の必要性と意義がある。本講義では、スポーツの社会的な意味と価値、その機能などについての基礎的理解を得ることをねらいとしている。

［参考書］：『スポーツ社会学講義』（大修館）

スポーツ法学　濱　野　吉　生

ここではまず、スポーツ法学の基礎理論と構造について説明し、次に、スポーツ法学が直面している具体的な問題を適宜取り上げていきたいと考えている。

参考書については、授業のはじめに指示する。

スポーツ文化論　寒　川　恒　夫

スポーツを文化の問題として論じるために、以下の諸項目について講義をおこなう。

1.文化の諸概念
2.スポーツの諸概念
3.スポーツ文化複合
4.スポーツと神話と世界観
5.スポーツと民族生活
6.スポーツと文化伝播
7.スポーツと構造機能論
8.武道と日本文化

9.スポーツと身体技法
［教科書］：『スポーツ文化論』（杏林書院）

スポーツ経営学　　梅　澤　宣　雄

スポーツ経営学とは何か。その意義と、理論体系について、組織論、経営過程論、行動科学等に依拠しながら概説する。

バイオメカニクス　　永　田　　晟

多くの基本運動とスポーツ活動を工学、スポーツ医学、解剖学、生理学、物理学、リハビリテーションの面から考究し、それぞれの運動メカニズムを講義する。運動現象の機構をわかり易く詳講し、運動方程式とスポーツ・運動のモデル化を演習しながら実証する。バイオメカニクス上の基本用語（英語）に熟知し、スポーツ科学のスペシャリストとしての生体機構上の知識を学習する。

①基本運動の分類と人体形態・組織解剖学
②スポーツ活動時の骨・筋、靭帯、神経、血液・心臓、呼吸機能の働き
③バイオメカニクスの研究方法と計測法
④運動神経機構と神経支配（運動生理学）・敏捷な動き
⑤キネテクスな解析例（運動力学）
⑥キネマテックスな解析例（計量測定学）
⑦動きのエネルギー効率と競技力の向上、そしてトレーニング効果
⑧バイオ・フィードバックとバイオ・フィードフォワードの応用（制御工学）
⑨筋パワーの出し方と使い方－微分機能
⑩各種運動方程式と生体工学の基礎（モデリング）－打つ、投げる、滑るなど
⑪周波数分析とフーリエ展開、そしてパワースペクトルの算出法
⑫プログラム制御と構え
⑬生体信号のフーリエ変換（周波数分析）と－ＥＣＧ，　ＥＭＧ，　ＥＥＧなど
⑭歩行運動の各種分析－筋電図、ゴニオグラフ、床反力－、そして疾患者との比較
⑮第１～３種のてこの応用と計算－アキレス腱断裂と裂離骨折
⑯床効による力積とエネルギー計算－積分機能
⑰スピードの出し方と運動スキルの上達法－運動学習
⑱ＯＴとＰＴの役割とリハビリテーション医学
［教科書］：『バイオ・キネテックス』（杏林書院）

スポーツ医学　　福　林　　徹

人体の運動器の機能解剖とそれに関連した外傷・障害ににについて部位別に解説を加える。また各部位の代表的な外傷・障害について、その診断法、現場での処置、一般的診療法をビデオなどを使用しながら解説する。またスポーツでよく起こる内科的疾患について述べ、その予防・治療法について解説する。

スポーツ生理学　　村　岡　　功
中　村　好　男

運動・スポーツと関連深い生理的機能は、主に運動をコントロールする神経系及び内分泌（ホルモン）系、運動を直接発現する骨格筋系、ならびに運動を持続する呼吸循環系である。運動時にはこれら諸機能が互いに関連しながら応答し、一方で、繰り返しの身体トレーニングはこれら諸機能に合目的的な適応を引き起こす。しかし、これらの応答ならびに適応は、運動・スポーツの種類によって異なってくる。

そこでここでは、これら生理的諸機能に対する一過性の身体運動ならびにトレーニングによる影響について、運動・スポーツの種類との関連で捉えることとする。なお、この科目を履修するにあたっては、基礎的な生理学の知識が必要とされるので、各自でそれを理解しておくことが望ましい。

スポーツ心理学　　上　田　雅　夫

近年、スポーツにおける精神面の重要性が指摘されている。昔から、運動技術を十分に発揮するためには「心・技・体」の三つの要素が充実していなければならないと言われてきた。ここでは、特に「心」の部分の強化法を中心に扱うが、あわせて、効果的な技術練習、体力トレーニングの進め方について述べる。主な内容としてはつぎのものを予定している。1）スポーツ行動の本質、2）運動・競技の適性、3）運動学習の諸問題、4）競技力について、5）緊張異常（あがり）とその対策。

参考文献は必要に応じて講義で紹介する。

人間科学テーマ科目

Human Science Today［現代の宗教］　　渋谷利雄

程度の差はあれ、近代化は地球的規模で進行し、科学的な知識と技術は広く浸透している。こうしたなかで、今回、宗教活性化の時代をむかえている。激発している民族紛争も宗教活性化と深く関連している。ここでは、現存する最大のカリスマ、インドの生き神サッティヤ・サイババの信仰を主にとりあげていく。サッティヤ・サイババはインドのみならず世界中に多数の信徒を得ている。サイババ現象の実態を見ながら、今回の宗教について考察してみたい。

Human Science Today［臓器移植］　　小室輝昌

現在、社会的にも重要な話題となっている臓器移植の問題について、多数の講師により多面的に取り上げ、学生個々の意見形成に資する。内容としては、移植に伴う法的、倫理的問題、免疫学的課題、実施上の医療技術的課題、移植によって得られる健康上の利益、あるいは、それらの理解の基礎となる臓器の解剖生理学的特徴、脳死の医学的根拠などついて解説を行う。

Human Science Today［オリンピック］　　林　敏弘
太田　章

近代オリンピックは、1894年6月の「パリ国際アスレチック会議」で発足が決定し、1896年にアテネで第1回大会が開催されて今日に至っているが、1996年のアトランタ大会で100周年を迎えている。

また、1924年以来冬季競技大会も開催されており、1998年2月には、長野市において第18回大会が開催される予定である。

本授業では、近代オリンピックの創始者と呼ばれるクーベルタンのオリンピック理念、100年にわたる近代オリンピックの歴史、日本スポーツとオリンピック、現代オリンピックの実態、オリンピックの体験談その他についての講義を行う。

Human Science Today［子どもと現在］（本年度休講）

生物学概論　　木村一郎

人間を理解しようとするとき、生物としてのヒトを理解することはきわめて重要なことである。様々な生物現象とそのメカニズムについて、分子から個体に至る様々なレベルでの構造と機能に関する理解をもとに考察し、人間理解の一助となるようなものにしたい。また、それらに関連した最近の応用生物学的知見をも紹介したい。

数　学　　関　達也

おもに整数を題材として抽象代数学の基礎的な内容を講義します。

化　学　　大山俊之

われわれの日常生活にも大きな関係をもたらす今日の科学技術の進歩・発展には、化学の進展もおおいに寄与している。この化学における二つの大きな分野である化学物質の合成と分析に関連して、化学結合や分子構造などの化学の基礎概念をわかり易く解説し、後半ではこれらの知識を活用して、公害物質や薬物の検出・確認に最近盛んに利用されている機器を用いた化学分析について学ぶ。

物理学　　千葉明夫

現代の物理学が対象としている範囲は広く、それらを網羅的に紹介することはあまり意味をもたない。講義では、まず近代科学的思考法の原点となった古典力学を取り扱う。ニュートンは身近で見られる運動と、大宇宙で起こっている運動とが同じ簡単な基本法則にもとずいていることを看破し、運動の法則を発見した。講義では「運動の法則」の持つ物理的な意味を中心にして述べる。自然の法則は一つはエネルギー保存という大原理で現わせる。物体の運動に関する力学的エネルギー保存則はその例である。エネルギー保存則は時間が逆転しても成り立つ、時間の経過に対して対象的な法則である。

一方、カップにつがれた熱いコーヒーは時間とともに冷えていく。一度冷えたコーヒーはいくら待っていても自然には熱くならない。自然にはこの例に見られるような一方向にしか進まない、時間の経過に対して非対象的な法則性がある。コーヒーの例はエントロピー原理といわれる自然を支配する大原理の一つの例である。自動車のエンジンも生命のメカニズムも公害問題もこの原理の支配下にある。この法則性は熱力学という体系にまとめられている。講義の後半はエントロピーについて述べる。

細胞組織学（本年度休講）

生　理　学　　村　岡　　功

生理学は生命現象を対象とし、そのメカニズムを探求する学問である。ここでは、ヒトの正常な生命現象を取り扱うが、その内容は主に、骨と骨格筋、感覚と神経、内分泌、血液、呼吸、循環における一般生理学の基礎から成っている。

ここでは、目や耳から入った情報がどのようにして脳に送られ、そして、脳から骨格筋や内臓にどのようにして指令が送られるのか、また、生体機能をコントロールするホルモンの働きはどのようなものであるのか、骨格筋はどのようなメカニズムで収縮し動物本来の動くという機能を果たしているのか、さらには、生きるために不可欠な酸素をどのように体内に摂取しエネルギーを生み出しているのか、等の疑問に答ながら、生物としての人間、即ちヒトの生命活助の基本現象を捉えることとする。

内　分　泌　学　　山　内　兄　人

人間など動物のからだは、早い情報伝達組織である神経系と、ゆっくりした情報伝達組織である液性情報伝達機構により制御されている。液性情報の中心的なにないてはホルモンを分泌する内分泌器官である。この科目では、からだのなかの内分泌器官の構造と働きを中心に、最近の知見も合めホルモンがいかに多くの機能に関わっているか学んでいく。ホルモンが脳に作用することと、脳も一つの内分泌器官であることも知ってもらいたい。

免　疫　学　　加　茂　　功

生体全体はバランスよく統御されており、病原体や異物の侵入に対しても恒常性を維持しようとする機構が作用する。これを生体防御と呼んでいる。その最も進化した機構が免疫と呼ばれるものである。免疫応答は自分と自分でないものを識別するプロセス、非自己と識別したものに対する免疫反応を増幅するための細胞や、分子を産出するプロセス、そして非自己と一度遭遇したリンパ球クローンを免疫記憶として温存し、次回には速かに応答できるようにするプロセスから成り立っている。

最近の学問の進歩はめざましくこのようなプロセス等を細胞、遺伝子、分子レベルでとられることが可能になり、病気の予防、治療の面への利用もはかられている。本講では、以上の点を論じていきたい。

発 生 生 物 学　　木　村　一　郎

著しい発展を遂げつつある発生生物学について、その基盤となっている古典的発生学と最近の発生遺伝学に関する知見を基礎として紹介する。特に、細胞の文化、形態形成などを扱いながら、個体発生における構造と機能の構築の基礎となる細胞の動態について考察する。また、最近の発生生物学の大きな進展について、その基盤となっている研究法や発

生工学、生殖医療などの応用的な分野についても紹介する。この講義をヒトの一生における生殖、発生、成長、成熟、老化、死などの問題を考えるときの一助となるものにしたい。

遺　伝　学　　飯　野　徹　雄

生物の遺伝の仕組みを遺伝子を中心に次の項目に沿って解説する。

(1) 生物の遺伝様式：染色体遺伝、細胞質遺伝、感染遺伝

(2) 遺伝情報の実体と遺伝子：遺伝情報分子としてのＤＮＡ、自己複製の仕組み

(3) 遺伝的変異とその制御：染色体変異、遺伝子突然変異、動く遺伝要素

(4) 遺伝情報の発現と調節：転写と翻訳の過程、調節にあずかる作用因子

(5) 遺伝子工学とその応用：組換えＤＮＡ技術、遺伝子のクローン化、遺伝子治療

生　化　学　　井　上　宏　子

細胞を構成する分子には多くの種類があり、それらが様々な機能を担っている。
本講義では、そのうちのタンパク質、脂質、及びそれらの関連分子の構造、機能、代謝について概説する。

薬　理　学　　柴　田　重　信

薬物は疾病の治療のみならず予防的側面からも広く使用されている。このような薬物は身体に入り、生体との相互作用の結果として薬の効果を発揮する。本講義では、薬物の主作用ならびに毒（副）作用の発現機序について、また、自律神経作用薬や向精神薬などの薬理作用について解説する。

薬物は健康増進のため、さらにスポーツ医学の領域で広く繁用され、ドーピング問題も提起している。そこでこれからの薬物もその作用発現メカニズムの面から解説を行なうつもりである。近年社会問題化している、コカイン、大麻、覚醒剤等の乱用性薬物さらにニコチン中毒、アルコール依存症等の薬物作用学についても述べたい。

分子細胞生物学　　吉　岡　　亨

生命体の最小単位は細胞である。したがって生命を本質的に理解するには細胞を徹底的に理解する必要がある。
細胞の最小単位は分子である。細胞の理解のためには、細胞の働きを分子という言葉で記述することが必要である。

分子という言葉とは何か？それはタンパク質、脂質、ＤＮＡ、ＲＮＡ、そして金属イオン等を指している。

本講義では、ワトソン博士の著書「細胞の分子生物学」に拠つて生命を分子レベルで理

解することを試みる。

放射能生物学　　井　上　宏　子

放射性同位元素（RI）を使用するためには、教育訓練を受けることが法律で義務付けられている。ここでは、卒論でRIを使用する予定の人に対して、RIの安全取扱法、法律等の講義を行う。テキストは「アイソトープの安全取扱入門」（日本アイソトープ協会）を使用する。但し、実際にRIを使用するには放射能生物学実習を合わせて受講する必要がある。

進　化　学　　田　中　伊知郎

この講義では、人類に至る過去の道筋を探ることを目的とします。まず、直接の記録である化石が明らかにできることと、その限界を示します。その次に、DNAという物質を用いて現生の生物の系統が分かることから、今生きている動物と人類の間の近縁関係を求めます。次に、現在の行動や形態を人間と（人に近い動物であるサル類を中心とした）動物の間で比較し、系統が人に近づくにつれてどのように変遷するかから、過去に失われた「人にいたる傾向」を考察します。特に、人類の特徴である「文化」に至る「行動の社会的伝達」（ＤＮＡという物質的媒体にのらずに、行動に関する情報が、個体から個体へ、世代から世代へと伝わること）の進化を重点的に扱います。なお、できる限りビデオの上映を用いて、個々の行動を説明します。

自 然 人 類 学　　乗　越　皓　司

本講義は、自然人類学の一領域である霊長類学の立場から、人間の社会や行動の起源を、次の３項目について考察する。まず、人間の家族社会を考えるため、ニホンザルや類人猿などの霊長類の生態および社会構造について述べる。次に、人類進化に重要な役割をはたした道具行動の問題を下等動物やチンパンジーなどから述べ、人類進化の特徴と石器文化のはたした意味を考える。最後に、動物と比較して人間だけの特質である言語に関連して、動物のコミュニケーションと類人猿の“言語”実験を紹介するとともに、言語の起源を考える。なお授業では、アフリカや東南アジアでの動物調査の経験を加えるとともに、動物行動の理解を助けるために１６ミリやビデオなどの映像もできるだけ利用したい。

放射能生物学実習　　井　上　宏　子

放射性同位元素（RI）を使用するには、実験操作に習熟している必要がある。この実習ではRlを使用するような各種の実験を、 RIを使用せずに行う。但し、実際にRIを使用するには放射能生物学を合わせて受講する必要がある。

脳神経科学　　小室輝昌

脳神経科学概論

神経系の働きを構造的基礎の上に理解するよう

①神経系の構成

②神経細胞の構造

③信号の発生と伝導・伝達機序

について概説する。

［参考書］：

Pninciple of Neural Science, Kandel and Schwartz, Elsevier Co.

From Neuron to Brain, Kuffler er and Nicholls, Sinauer Co.

精神生理学　　山崎勝男

人間の知覚，思考，情動，そして活動は具体的に表現できる現象であり、適切な実験デザインのもとに得られた身体の生理的な反応は、人間の本質に光を当てることができるという仮説に精神生理学は立脚している。人間の精神的な変数を独立変数として操作し、それに対応して生じる生理的な変化を従属変数としてとらえ、それによって心身の因果関係を解明する心理学と生理学の学際的な学問分野が精神生理学であると定義してもよい．具体的には測定方法論が確立された生理指標、つまり脳波、眼球運動、心拍、呼吸、脈波、皮膚電位活動、筋電図等を使用して、時事刻々と変化する心の働きを説明、解釈しようとするところにその特徴がある．この授業では具体的な研究例をもとに、精神生理学の本質を講義してみたい。

神経行動学　　青木　清

神経行動学は動物の脳神経における生理学的基礎を理解する学問分野である。講義ではプリントやビデオを使って脳・神経系における感覚情報処理の仕組みや、行動発現機構の仕組みについての最近の研究成果について述べる。多種多様の動物行動の発現に関するローレンツ、ティンバーゲン、フリッシ等の行動生物学者による研究成果を解説した上で、以下の課題についてとりあげる。

1. 脳の中に刷り込まれた「世界」
2. 小鳥の歌と脳神経の発達
3. フクロウの音源定位と脳
4. コウモリの聴覚行動
5. 物体視と脳
6. 求愛行動とフェロモン

7. デンキウオの電気定位と脳

行動学概論　　春木　豊

行動学と称する学問はまだ確立したものとはいえない。関連した既存の学問としては、心理学における行動論と動物行動学である．行動学はこれらの上にたって、行動そのものについて考究する学問であると位置ずけている。ここでいう行動学は、従来の行動にかかわる学問とやや異なるところが若干ある。その一つは、下等動物から人間までの行動を考えるということである．次に行動の概念が従来より広くあつかわれることである。すなわち、行為から、身体の微細な動きまで含める。そして、もうひとつは、意識の結果としての行動のほかに、意識の原因としての行動を考えることである．

人間のさまざまな側面の統合としての行動と、統合された人間に影響を与えるものとしての行動という両面から、行動に焦点をあてて人間を考える学問である。

比較行動学　　根ヶ山　光一

生物は行動という生命現象を通じ、環境に適応して生き、子孫を残している。本講義においては、そのような生の基本的側面である行動について、その発現のしくみ、行動のもつ生存上の機能、出生から死亡までの行動の生涯発達、行動の系統発生などを扱う比較行動学（エソロジー）について概説するとともに、その関連領域である社会生物学の基本的な考え方についても紹介する。そしてそのことを通じて、他の動物と比較した場合の、ヒトの行動の独自性と共通性を確認し、人間存在の特徴を理解する。とくに、講義のなかでは霊長類研究の基礎的知見についてもできるだけ言及し、そのことを通じて、ヒトはどのような行動特性をもった霊長類であるのかを考察する。

発達行動学　　根ヶ山　光一

行動は、身体器官と同様に生物の適応の「道具」である。生物は行動を介して物理・社会的環境と身体的にかかわりをもち、そうすることによって生きている。その行動のパターン・強度や対象などは、身体と同様、というよりもむしろ身体と相互にかかわり合いながら、成長につれ変化していくものであり、その変化がすなわち生物の発達である。未熟な子が親の保護などにも助けられながら徐々に成熟し、やがて親となり子孫を残して没していくという意味では、行動発達は繁殖過程の一断面でもある。本講では、このようにヒトの生存と適応に直結する行動の生涯発達を、胎児期・乳児期・幼児期・児童期・青年期・壮年期・老年期にわたって概観する。わけても、親子関係・兄弟関係・友人関係・夫婦関係など、社会的行動と対人関係におけるヒトの成長に応じた変化について、「自立」と「依存」、「個」と「関係」のかかわりなどに注目しつつ、行動学的に論考する。

人間行動と環境　　黒田　勲

地球上において生存している人間を含めた生物について、地球史的および宇宙環境の視点から空間、時間、重力、加速度、その他の物理、化学等の環境下における人間の生存、健康、行動の限界と行動変容等から人間特性の基本的性能を考察する。

種々の作業環境における人間パホーマンスへの影響状況を、それらの作業の事故、災害、不具合事例より追究し、人間行動に及ぼす外的、内的、さらには集団的要因を解析する。これらの現象を踏まえ、人間信頼性の原則について検討し、安全人間工学的視点から今後の人間－機械－環境系のあるべき様態を求める。

動機づけ理論　　青柳　肇

動機づけは、心理学研究のなかでも基礎的領域の一つである。何故そのような行動をとるのか、何故そのように考えるのか、といった「何故」の問題を扱うのが動機づけの研究領域だといってよい。ここでは、動機づけの考え方の古典的なものから現代のものまで、歴史的変遷を踏まえて述べていく。

非言語行動論　　鈴木晶夫

非言語的情報伝達手段としての各種記号、サイン、及び人間の言葉以外の情報伝達手段である、表情表出、視線行動、姿勢、身振り、空間行動などをテーマにとりあげる。これまでの研究から導き出された事実を中心に講義し、非言語行動を通じて、動物や人間がどのようにして他者とコミュニケーションを形成し、維持し、発展させているのかについて考えたい。

認知心理学　　宮崎清孝

認知心理学は哲学の認識論における知についての根元的な問いを引き継いで、人間の知的な機能についての様々な問いを提出していく心理学である。認知心理学には基本的な観点の異なるいくつかの考え方があるが、ここでは人間の“心”の働きがその身体の活動と不可分であり、その心＝身体が周りの環境や他の人間、社会と相互作用しながら意味を生み出していくと考える関係論的な立場にたって考えていく。環境の意味についての直接的な覚知である知覚活動、可能的世界にまで覚知の範囲を広げたイメージ活動、そしてさらにそれを社会、文化とつなげる言語およびその基礎としての概念の活動について、関係論的立場とそれ以外の立場を対比させながら論じていく。教科書は使用せず、参考図書をその都度指定する。

エルゴノミクス（基礎）　　石　田　敏　郎

エルゴノミクスの基本的な考え方と、エルゴノミクスを理解するために必要な基礎的事実について具体的な実験例や身近な例ををもとに概説する。主な内容は以下の通りである。

(1)　エルゴノミクスの歴史、考え方、研究範囲、エルゴノミクスの目指すもの
(2)　視覚表示の諸問題
(3)　人間の応答についての諸問題
(4)　精神作業の諸側面
(5)　マンーマシンシステム
(6)　疲労についての諸問題
(7)　操作系についての諸問題
(8)　ヒューマン・エラー

教科書は特に指定せず、配布するプリントを中心に講ずる。

エルゴノミクス（応用）　　野　呂　影　勇

エルゴノミクスすなわち人間工学に将来、関わる学生にとって必要とする基礎的な考えを踏まえて、課題解決への応用知識修得を目的としている。まず、人間工学入門すなわち、人間工学の方法の基本（人を評価する方法／人に評価させる方法に中心を置く）と新たな方法の解説を行う。

人間工学の応用として、身装系（含む身を守る安全システム）など10のデザイン系の実例の紹介と解説である。最後に、野呂研究室の研究実績のうち、社会的に反響の高いものを二三紹介する。

第一部　理論と方法編

人間工学入門（人間工学の基本と新たな話題）

人を評価する方法／人に評価させる方法に中心を置くが、新たな話題的方法も加える

1．定義と測定のコンセプト

1.1 人間工学の定義と研究の方法としてのParticipatory Approach

1.2 人間工学の基本的測定

1.3 ヒトと物の関係を表す尺度　人間•時間•空間

1.4 人体計測と座学

1.5 ひとと情報の関係　刺激と反応

中枢神経をとらえる　筋電の測定反応時間の測定

どこを見ているかをとらえる（眼球運動の測定）

1.6 ストレスと人間の機能の有効持続

2.設計ガイドライン

2.1エルゴノミックスの設計原理
2.2認知心理学の設計原理
3．官能評価と感性
4．人間工学の進歩
第二部　実例編（人間工学のデザイン）
以下の10つのデザイン系に分類される製品などについて講義する。
1．身装系（含む身を守る安全システム）
（身体を守る装着品の快適性）
2．労働負担軽減のデザイン　その1　ダンボールをたやすく扱う
3．労働負担軽減のデザイン　その2　工具類の握り易さと使いやすさ
4．情報•コミュニケーション系
4.1　作業者がノート感覚で携帯できるデザイン
4.2　作業者の参加意識と心理を向上させるデザイン
5．パネルやコントローラーを工場環境と調和させるデザイン
6．エクニックと年齢•ハンディキャップ（人間の多様性）
7．駆動•回転装置の美しさ追求
8．計測機器の冷たさと硬さの排除のデザイン
9.3　次元デザインによる恐怖感を無くす
10．テレビゲーム世代の作業者のためのデザイン
第三部　医療•看護•リハビリテーションの人間工学

シンボルシステム論　　蔵　持　不三也

さまざまなシンボル表象の歴史的変遷とその社会的役割について考察する。資料は講師が用意する。スライド・ＶＴＲ使用。参考文献は教場にて紹介。

シ ス テ ム 論（本年度休講）

言語・記号論　　本　郷　　均

われわれは、言語や記号を日常的に使用しているため、それについては十分よく知っていると考えてしまい、それが何であるかについて考えようなどとはしないのが普通であろう。本講では、その言語および記号現象について、当たり前と思われていることを敢えて掘り下げて考え、その原理的・理論的側面を考察することを主目的とする。つまり、個々の言語（日本語や英語など）や個々の記号現象に関する具体的な考察ではなく、ある程度抽象的・哲学的な内容になる。一般に記号論は、ソシュールの流れをくむものと、パース

の系譜に属するものがあるとされているが、本講では、前者に焦点を絞る。ソシュールの言語学から始め、メルロ＝ポンティを経て、ロラン・バルトの記号論・物語論・テクスト論について論ずる。時間的な余裕があれば、クリステヴァやデリダ、あるいはエーコの考えなどにも触れる予定である。教科書は使用しないが、適宜資料を配布する。

視覚言語論　　相馬一郎

ノンバーバルコミュニケーションにはいくつかのものがあるが、ここでは、これらを背景とした上で、視覚言語といわれているものを中心として論ずる。視覚言語の特色は順序を追わなくても見たときにその伝達内容を把握することができるところに特色があるとされている。サイン、シンボルをも含め、できるだけ例を示しながら講義をする予定である。

造形心理学（本年度休講）

コミュニケーション論　　臼井恒夫

人間を主体にしたコミュニケーションを考えるとすれば、コミュニケーションとは人と人との間の相互行為にかかわることであり、その相互行為が両者間に共通ないし共同のものを生み出していくことであるといえる。　コミュニケーションが人と人との間の「共同化」を媒介することによって、集団や社会の形成が可能となるだけでなく、個人の発達にも重要な役割を果たしている。

コミュニケーションというと、えてしてマス・コミュニケーションやマスメディアのみが注目されがちであるが、社会のあり方を根本的に構想しようとするときにコミュニケーションの原理的な考察は欠かすことができない。ここでは、まずコミュニケーションの基礎的な原理について考察し、次にマス・コミュニケーションの影響と機能についての理論を紹介する。社会学的視点からコミュニケーションについて解説した概説書は少ないが、次の2点を参考文献としてあげておく。

林進編『コミュニケーション論』（有斐閣、1988年）、船津衛『コミュニケーション・入門』（有斐閣、1996年）。

マスメディア論（本年度休講）

学習とメディア　　野嶋栄一郎

マルチメディア時代に入り、我をとりまく環境は、急激な変化をとげている。学習という我々にとって日常的な営みの中にも当然な変化がおこっている。メディアなくして人間のコミュニケーションの多くは成立しない。メディアの発展を追いながら、それらの人間

の“考える”という営みの関連をシンボルシステムという概念を媒介としながら追求する。又、コンピュータリテラシーを含めメディアリテラシーといわれる新しい能力観についても言及を試みる。

ジャーナリズム研究　　河　村　好　市

真実を報道することを社会的使命とする新聞が匿名記事を載せたり個人の名誉を棄損し企業や社会的組織の信用を失墜したりする報道を繰り返す。原因はなにか。名誉や信用を回復するための救済策はあるのか、こうしたアングルがら「報道と人権」のあるべき姿を探る。毎回、具体的な事例を捉えて、学生とともに考える。

講義では①新聞の特徴と構成②新聞の使命と新聞記者の報道倫理③匿名報道の欺瞞性④匿名発表との闘い⑤報道被害者の救済対策⑥社内オンブズマンの役割とその限界点⑦読者迎合的逸脱報道の諌め⑧DNA鑑定は人権擁護のための科学的操作法か⑨のぞましい情報への接近法⑩NIE（教育に新聞を運動）の今日的意味と社会的効用----などを、逐次、取り上げることとする。講座開始の初日に学生諸君に対してアンケート調査を実施したい。講座は本来、講師と学生のツーウェイ方式を取るべきものと思うから。

政　治　学　　浅　野　房　一

近代の民主主義と資本主義という不可分の政治経済体制が成立してきた思想史的背景と近代論理に焦点をあてる。特にこの論理展開の根拠となる西欧近代人の人格形成と社会のあり方、個人主義が体制化してくる論理構築を追いながら、近代民主主義体制成立までの政治思想史をルター、マキャベリー、デカルト、ホッブス、そして、ルソーの諸思想の流れと対立を巡って概観する。そして国境なき世界となりつつある現代の資本主義世界における政治の可能性と現代人のあり方を探る。

Ⅰ．近代政治学の根源

1．宗教改革の論理－近代人の自我

2．ルター思想における政治学

3．ルター対マキャベリー

Ⅱ．近代政治思想の哲学的基礎

1．コギト思想の政治学

2．ホッブス対デカルト

3．近代人の個（主観・主体）

Ⅲ．政治的近代の成立

1．ルソーの政治思想探求

2．民主主義思想の経済学的、社会学的背景

Ⅳ．現代における政治

1．先進資本主義体制における個人と社会

2．ポストモダンの政治と経済

3．政治におけるイデオロギーと機能のシステム転換

経　済　学　　浅　野　房　一

経済を現実の生きた経済現象のレベルで把え、欧米と日本での資本主義システムの機能の差異を分析しながら実際の経済の動きを理解することを目的とする。そのために国際企業、また国境を超える現代経済世界で巨大化してゆく多国籍企業のあり方の分析を通じて日本経済と国際経済の姿を把える。したがって本講義は国際経済関係論であると同時に国際企業論でもある。

Ⅰ．　1．国際経済の現状

2．ソ連邦崩壊以降の国際経済システム

3．欧米、日本、アジアのシステム連動と差異

Ⅱ．　1．国際経済における多国籍企業

2．日本企業と欧米企業

3．国際企業の形態論

4．企業文化と国際化の問題

哲　　学　　宇　波　　彰

われわれはただ生きているのではなく、考えて生きている。フランスの思想家パスカルの「人間は考える葦である」ということばはそのことをよく表現している。哲学は人間の思考のエッセンスであり、哲学のない人間の行動は、動物の行動にすぎない。今日、さまざまな領域で人間の社会にひずみか現れているのは、哲学が欠如しているからではないだろうか。現代ほど、哲学の回復が求められている時代はないように思われる。しかし哲学の復興のきざしがあるとはいわれながらも、どのように哲学に接すればいいのかわからないという声を聞くことが多い。この講義では、そのような要望に応えつつ、現代哲学にとっての重要な問題である「自己同一性」「他者との関係」「オリエンタリズム」などのテーマについて、現代哲学の発展をたどりながら考えることにしたい。教室では対話が重視され、また多くのテクストを読むことが求められよう。

倫　理　学　　大　崎　　博

よき生を送ることは、いつの時代においても人間の変わらぬ願いである。しかしながら、他者との関係を抜きにして自己の人生の幸せを願うことは、ほとんど意味がない。よき生

を送るために他者との関係を考えることは、すなわち実現するべき人間の倫理を考えることである。しかも、その場合の他者とは、物や機械のような単なる客観的対象としての「人間」ではなく、自己と同じように様々な欲求の充足を求めて生きている、血の通った具体的な「ひと」である。

本年度は、以上のような「他者の倫理」という観点から、1　倫理学の基礎的な概念と学説を学び、2　現代の応用倫理の代表的な諸問題を考察することにしたい。余裕があれば、発表とディスカッションを入れて進める予定である。何よりも、学生諸君の主体的、積極的な参加姿勢を期待する。第一回の講義の際に、教料書、参考書、成績評価等についての詳細を説明するので履修者は必ず出席すること。

バイオエシックス　　木　村　利　人

現代の生物・医科学技術の急激な進歩と発展に対応して展開されてきた「バイオエシックス」の基本原理とその体系を、基本的人権及び公共政策の形成に焦点を合わせつつ講義する。バイオエシックスの具体的事例につき、Ｂｉｄｅｏによるプレゼンテーションを行い、小論文の提出、討議による学習等も行う。

教　育　学　　林　　幹　夫

人びとの教育への期待は教育の量的拡大と質的低下を併せて進行させ、教育の氾濫・混迷状況と、その中でのさまざまな病理現象をもたらすにいたった。このときにこそあらためて「教育とは何か」を問うことの必要性が痛感される。教育学は、だれもが経験するごく身近な事象である人間形成行為としての教育と、これに関わる諸条件を客観的・科学的に解明し理論化しようとする学問である。そのようなものとしてわれわれの日常と無縁であったり、実践行為からかけ離れていたりしてはならない。

以上のような認識から、前半には教育思想史上の主だった作品を手がかりに教育の本質について、後半には現代教育の問題状況を解明すべく、学校教育の歴史を概観しながら、高等教育の大衆化と学歴社会、脱学校論などを取り上げながら、教育の社会的役割について、受講者と共に考えてみようと思う。

テキスト、その他参考文献等については適宜指示する。

教 育 制 度 論　　沖　　清　豪

あなたが人間科学部にたどり着くまでに、否応なくつきあってきた学校という制度。そして今在籍されている「大学」も制度であり、未だにあなた自身の「人間形成」と教育制度とは切り離せない関係にあります。この講義では、あなたの「現在」を理解していただくために、教育制度「学」の知見を学んでいただきます。具体的には、近年の初等・中等

教育の改革動向や今進行している大学改革を素材として、教育制度とはあなたにとって何であったのかを考えていただきます。比較の視点を重視し、他の学問領域の知見も活用します。予定している構義内容は「公教育とは何か？」「道徳は教えられるか？」「学校の選択とは？」「学校制度といじめ」「制度としての大学受験」「大学とは何か」などですが、詳細についてはあなたの意見を参考にさせていただきます。出席を厳しく求めはしませんが、あなた自身の頭で考える努力は強く求めます。それでは教室でお会いしましょう。

教育環境論　佐古順彦　野嶋栄一郎

教育環境、特に学校環境の研究から、いくつかのトピックスを扱う。例えば小学校の「オープン学習」は伝統的な一斉学習とは異なる学習環境である。このような、クラスや学年や教科を超えて展開される学習場面の理論的考察をおこなう。また高等学校の学校モデルの研究や、大学環境尺度の研究も紹介する。

教授学習過程論　宮崎清孝

学習はある個体が単独におこなっている営みではなく、家庭や学校といった環境の中で、親や教師といった学習を援助する人と出会い、その助けを借りて世界との関わり方を変えていく営みである。学習者は単なる知識の受け手ではなく、教授者の側も教授学習の過程の中で変わっていく。教授者、学習者の双方とも、知識の習得をおこなうだけではなく、関係の中で自己を変えていく。教授学習過程論は、学習をこのように関係論的に捉えようとする試みであり、学習に対する古典的な情報処理論的認知心理学観とは異なった学習観を提供しようとするものである。方法的にも旧来の実験室的手法に飽きたらず、実践の場に入り込むフィールド研究の手法を提案する。教授学習過程は人の学習のすべての場に関わるものではあるが、この授業では特に学校の場に焦点を当て、そこで特に教師がどのような仕事をしているのか、という方向から、多くの実践を紹介しつつ進めていくつもりである。なお教科書は使用せず、適宜参考文献を紹介する。

ライフコース論（本年度休講）

教育心理学　岸　学

本講義では、近年の教育心理学の動向として注目すべき話題をとりあげて基本的な考え方と実践例を解説する。

内容は、

①認知論的な学習、特に知識獲得過程を主体とした学習のとらえかたについて

②教授技能の改善とその指導法、特に説明技能の獲得を主眼とteaching skill training

③知識・理解の評価から関心・意欲・態度の評価への移行とその実践である。

受講対象は学校教育に関心のある学生とともに、学校外のさまざまな教育場面での指導に関心のある学生とする。

テキストは授業時に指示する。また毎回資料を用意する。評価は試験成績と出席とを総合しておこなう。

発達心理学　　青柳　肇

発達心理学は、個体発達（生）的には精子と卵子の受精の瞬間から誕生を経て死に至るまでの行動の変化を、系統発達（生）的には原生動物からヒトまでの行動の変化を扱う。両者の関係を述べた後、様々な領域の個体発達が対人関係とどのように関わるかについて述べる。

認知行動理論　　根建金男

認知行動療法は、行動療法という科学性を重視する治療法と精神分析に代表される精神療法が融合されてつくられた比較的新しい心理療法である。認知行動療法でいう認知とは、思考、言語、イメージのことで、これらに焦点を当て、またそれを活用することで、私たちの問題になる感情や行動を改善しようとするところが、この治療法の大きな特徴である。認知行動療法の基盤になっているのが認知行動理論であるが、治療法と理論は切り離せない関係にある。講義の中では、認知行動療法の概説を行い、背景となっている思想や理論についてふれ、代表的なアプローチ（認知行動療法には多様なアプローチが含まれる）の理論と実際について述べる。

エゴアイデンティティ　　上里一郎

アイデンティティという言葉は、日本人としてのアイデンティティ、心理臨床家としてのアイデンティティなど日常用語となっている。これは、自分を心理臨床家だと意識しているかどうか、心理臨床とはこのようなものであると捉えており正に自分はそれに当てはまると自覚していることを意味している。

人間は誕生いらい社会の中でさまざまな同一性を形成していくが、これらの同一性を統合するものがエゴ・アイデンティティ（ego identity）である。

講義では、アイデンティティの理論（ロジャーズの心理学、バンデューラの自己効力論、エリクソンのアイデンティティ論、フロイトの自我論など）、アイデンティティの測定、アイデンティティ研究の課題などをとりあげる。

イメージ自己体験法　　門前　進

イメージ体験はさまざまな領域で用いられている。そのうちのひとつに、心理療法がある。それはイメージ療法と呼ばれているが、イメージ療法のなかでの用いられ方の一つに感受性訓練がある。この授業でほ、感受性訓練として、イメージを自分で体験する仕方について学んでいく。それと同時に、イメージとは、ということについても学んでいく。

授業のなかでは、実際にイメージ体験もしていくので、イメージ体験をしたくない人は、この授業を取らないようにしてほしい。具体的には、リラックスの仕方を習得し、その状態でイメージ体験をしていく。そして、それらのイメージとの関係の持ち方について、いろいろ考えていく。

（参考図書：イメージ自己体験法、門前進著、誠信書房）

臨床心理学　　神田信彦

現代人の多くは、心理、社会的環境だけでなく時間・空間的にも複雑でありながら、一面で空疎な環境のもとで生活している。そのため心身に不調を来す人々も少なくない、本講義では、その理解のために適応・不適応行動のメカニズムを検討し、そこからの回復のための心理学的な援助について考える。講義は以下の項目を中心に進める予定である。

1. 臨床心理学の立場と考え方、2. 心の発達と適応・不適応、3. 欲求・動機と防衛のメカニズム、4. 心理アセスメント、5. 心理療法、6. 児童期の心理臨床、7. 青年期の心理臨床、8. 成人期・老年期の心理臨床.

行動療法　　坂野雄二

行動療法の特徴は、さまざまな心理的問題を、社会化あるいは個性化の過程で誤って学習された習慣と考える点にある。講義内容は以下の通り。

①行動療法の定義と発想
②行動療法の歴史
③精神疾患、各種不適応問題の診断と査定
④臨床的介入の評価
⑤行動理論概説
⑥系統的脱感作法：不安への介入
⑦モデリング法：適応行動の獲得
⑧オペラント法：不適応行動の修正と適応行動の形成
⑨発達障害と自閉性障害の指導
⑩行動療法の適用症例と事例研究
⑪行動療法の最近の発展

単位取得は、10回以上の出席を前提とする。学期中3回以上ワークシートの提出を求める。提出されたワークシート、期末レポート、および期末試験結果を総合して成績を評価する。

性の生物学　　山内兄人

子供を残す機能である生殖機能は雌と雄で異なり、[性] として、社会にさまざまな形で関わりをもつ。[性] の基盤である生殖に関わるからだの機能は、雌では卵子形成一性行動一排卵一妊娠一分娩一授孔一母性行動、雄では精子形成一性行動といった一連の生理現象からなる。それらについて学び、さらに、女と男の脳の違いから生殖機能以外の女と男の違いなども考える。

性の心理学　　大木桃代

授業内容・計画：

私たちが成長していく過程において、「性」はアイデンティティの形成にも関連する大切な問題である。異性を理解しようとすることは、同時に自分をも理解することにつながる。本講座においては、心理学の観点から「性」を取り上げ、私たちが社会人として適応し、より豊かな人間性を身につけていく上で何が大切であるか、一緒に考えていくことを目的としている。授業では、「性」の心理学の歴史や、様々な観点からの現在の研究などを紹介する。実際に性に関する調査や実験も体験してもらう予定である。受け身でなく、積極的に授業に参加する意欲のある学生の受講を希望する。

参考書・テキスト：

教科書は特に指定はせず、必要に応じてプリント等を配布する。なお参考書として、「間宮武（著）　男と女　小学館」を推薦する。

成績評価：

授業中の小課題とレポートによって評価する。

性教育　　村瀬幸浩

性教育の必要性については父母、教師、子ども共通して認められるようになってきたが、その中身については、まだ十分にまとめられてはいない。人間を考える上で重要な課題であるにも拘らずこうした現状なのは、私たちにとって「性は学ぶもの」とのイメージが出来上がっていないことに依る。したがって講義ではあらためて性の科学の基本から人間にとって性とは何か、というところまで骨子になることをとりあげ、性教育のイメージと基本方向をつかめるようにしたい。

テキストは「ニュー・セクソロジー・ノート」（東山書房）

「性教育のこれまでとこれから」（大修館書店）（いずれも拙著）である。

生態系科学　　森川　靖

地球は、環境と生物が相互に作用し、1つの系をなしている。この系、すなわち生態系について、構造と機能の両面から基本的な問題を概説する。さらに地域生態系の特徴、生態系の発展と維持の機構について理解していく。後半は生態系と人間生存にかかわる諸問題のうち、食糧、資源、環境問題等を生態系の視点から順次述べ理解を深めたいと考えている。

動物生態学　　常田邦彦

「生物の生活に関する科学」とされる生態学は、もともと極めて多様な分野と対象を含んでいた上、最近３０年間の発展は著しい。「動物生態学」に限ってみても、その網羅する範囲は基礎理論から応用技術まで極めて広範囲に渡っており、限られた時間でその体系を紹介することは困難である。

本講義では、近年社会的な関心の強い「野生生物の保護管理」をキイワードとし、これにかかわる動物生態学と保護管理の基礎理論、応用技術、保護管理の実例と課題にテーマを絞る。特に、純粋な学問上の論議よりは現実的な問題との関わりを重視し、豊富な具体例を通して動物生態学のエッセンス、応用分野における有効性とその限界について紹介する。また、保全生態学などこの分野にかかわる学問の動向についても紹介したい。

環境史　　樋泉岳二

ここでいう環境史とは、単なる自然環境の歴史ではなく、人間と環境との関わり合いの歴史である．現在、考古学・文献史学や生物科学などの共同作業によって、全国の遺跡から出土する動植物遺体の分析を通じ、人間―環境関係の歴史を具体的に明らかにしようとする試みが進んでいる。本講では、私の専門領域である動物遺体分析を中心に、日本の縄文時代から近世にいたる研究成果を紹介しつつ、人間と動物との関係史の追跡を試みる．

一口に人間と動物との関係といっても、そのあり方は各時代・地域の自然・社会的背景と密接に関連しており、変化に富んでいる。そうした人間―動物関係の多様性・歴史性の考察を主軸に、気候・植生などの環境変動史の成果なども絡めつつ、日本人の自然観がいかに形成されてきたかについて展望することが本講の目的である．

人口学　　嵯峨座晴夫

人口学（demography）は、主として、人間の集合体である人口に変動をもたらす要因である、出生、死亡、移動の分析と、人口と社会経済的変数との相互関係を解明するこ

とを目的としている。最初に体系化された人口分析の方法、および応用としての人口研究の諸理論を紹介する。ついで人口問題について講述する。人口問題とは、人口変動が自然、社会、経済などとの関連においてひき起こす諸問題のことである。それは大きく分けると、人口増加がもたらす諸問題と、人口の停滞ないし減少がもたらす諸問題がある。

社会変動論　　小幡正敏

社会は「なぜ」変動するのか。この問いに答えることはきわめて難しい（もしかすると人間には答えられないことなのかもしれない）。しかし、社会が「どのようにして」変動していくかを問うことは可能である。この授業では、わたしたちの生きる《近代社会》ないし《近代》が「どのようにして」成立したか、これから「どこ」に向かおうとしているのかを、自我・性・家族・地域社会などの具体的領域にそくして考える。いわば「近代化論」である。教科書はとくに指定しないが、参考文献として富永健一『近代化の理論』（講談社学術文庫）を挙げておく。これ以外にも、そのつど関連文献を紹介しながら話を進める予定である。なお、成績評価は定期試験の点数に基づいておこなう。それなりの水準の答案を期待するので、そのつもりで。

社会調査論（本年度休講）

都市社会学　　臼井恒夫

都市とはいったい何か、都市論とは何を論じるべきものか、という問いかけは古く、かつ新しい。今日においても、都市に関する関心はいぜんとして高く、都市社会学の立場からの研究にせよ、都市計画、都市政策、都市経済学、景観論の研究にせよ、個別領域において都市をめぐる論議はいっそうの賑わいを見せている。これはおそらく、「都市こそ、人間と宇宙の間につくられた、目に見える人間的環境の最大単位」だからであり、都市へのまなざしがつねに人間とその活動に関する思考へと誘われていくからではないだろうか。本講も、都市社会学の研究を中心にしながら、現代の都市を考えてみようとするひとつの試みであるといえる。テキストは特に使用しないが、参考文献はそのつど教場で指示する。

社会集団論　　木下英司

これまでの集団研究は、集団そのものを＜実体＞として確定することからはじめているように思う。しかし、この前提は集団はとらえられるのであろうか。他の視点を提示する必要はないのか。そこで本講義においては、このあたりを検討することで、集団研究のための新たな視点を模索してみようと思っている。具体的に言えば、まず従来の集団研究の成果を確認しつつ、次にこれを批判的に検討することを通して、最終的には集団を〈関係〉

なり〈事〉としてとらえるべきであるという地平にまで辿りつきたい。そして、余裕があれば、更に家族などの現実の集団にあてはめて、その有効性を検証してみようと考えている。従ってまた講義内容が社会学以外の領域とクロスすると思われるので、受講者はこの点をご了承いただきたい。

公共政策論　　海野和之

現代の日本社会が直面する重要な公的課題を選定し、制度的な実態や政策上の論点などに焦点を絞りながら、一話完結型で講義を進める。取り上げるテーマとしては、1）政治・立法（①選挙制度の選択、②国会制度と政治改革）、2）外交・歴史（①戦後社会の成り立ちと戦後補償、②安全保障と国際貢献）、3）財政・所得分配（①税制の選択と財政再建、②社会福祉と社会保障）、4）地域・行政（①土地・住宅問題と都市計画、②地方分権と地方自治）、5）産業・労働（①日本型資本主義と日本型経営システム、②日本型企業社会と男女共生思想）、6）経済・通商（①規制緩和と行政改革、②国際摩擦と国際化）ーーーを予定している。受講する学生がより知的で自立した主権者として自らを鍛え上げるための一助となるような講義に努めたい。なお、初回の授業時間に受講上の必須事項を記したプリントを配付するので、必ず受領して指示に従うこと。

社会意識論　　和田修一

今日わが国においては従来のわが国の官僚制度にたいする見直しを求める声が大きいようである。行政改革がどれ程の成果をあげうるものかは即断できない問題であり今後の動向を注意深く見守る必要があるが、しかし社会制度の構造並びにその運用に関わる問題には国民の意識のあり方が大きなウエイトを持って関わってるという事実もまた再確認されて然るべき事柄である。すなわち、この問題に関してはわが国国民のもつ国家意識のありようが大きく関わっているのである。本講義では、わが国近代化のプロセスの中で国家にたいする国民意識の原形がどのように形作られてきたかを論じる。教科書としては、石田雄著『日本の政治と言葉　上：「自由」と「福祉」』及び『日本の政治と言葉　下：「平和」と「国家」』東京大学出版会、を用いる。参考書は、野口悠紀夫著『１９４０年体制－さらば「戦時経済」』等を予定している。

生態心理学　　佐々木正人

生物学と物理学と心理学の統合をめざしている、アフォーダンス理論の枠組、歴史的背景について議論する。とくにリアリズムの考え方と進化論の接点について考える。

テキスト：『アフォーダンス－新しい認知の理論』（岩波科学ライブラリ）
『知性はどこに生まれるか－ダーウィンとアフォーダンス』（講談社現代新書）

人間関係論　　香川　眞

1995年から1996年にかけて、香川は中国社会科学院の研究者とともに、「日中企業文化比較」を目的とする実証研究を実施した。ここで得られた重要な発見事実の1つは、「社会貢献を通しての自己実現ともいうべき中国に特有の集団主義」の存在であった。

科学的管理法、人間関係論、行動科学、の時代をへて、仕事場面における人間観、人事管理と組織管理の方法論は確立されてきた.

現在は、競争原理から共生原理への転換の時代であり、日本的家族主義、中国的集団主義にとどまらず、人間関係論の新しい視点が求められている.

講義では、1910年代の産業心理学の誕生から1920～30代のホーソン研究を契機とする産業社会学の誕生、そして1940～50年代の行動科学の台頭、そして現代的認識を歴史的に概観する。そして、これを踏まえつつ最近の実証研究の成果と今後の課題を明らかにする。

対人行動論　　小西啓史

日常生活において、われわれは多くの人と接し、さまざまな関係をもっている。本講義は、こうした対人関係における諸問題を、対人行動学の視点から解説する。

今年度は、主に“対人魅力（interpersonal attraction）”と“自己呈示（self - presentation）”について取り上げる。

対人魅力とは、他者に対する好意的、あるいは非好意的態度をいう。一方、自己呈示とは、相手に好印象を与えるために自分に関する情報を伝達することをいう。

そこで本講義では、対人魅力においては類似性や社会的望ましさなど「人が他者に対して好意を抱くようになる条件」について、また、自己呈示では弁解や正当化など「釈明行為」について、内外の諸研究をもとに考察する。

組織心理学　　浅井千秋

現代社会は「組織」の社会である。現代社会においては多くの人々が、企業、官庁、学校などの組織に所属し、生活時間の大半を費やしているのである。にもかかわらず、組織とは何か不自由でストレスの多い場所として一般にイメージされており、それゆえ、将来組織で働くことに漠然とした不安を抱いている学生諸君も多いことだろう。本講義では特に、現代社会において最も大きなパワーを持つ組織形態である「企業」における人間の心理を中心テーマに置き、企業の中で働く人々の意欲、適応、ストレスがどの様に生じ、企業がこれらの人々をどの様に管理してきたかについて学ぶことを通じて、組織と人間について理解すると同時に、学生諸君自らが社会で働くための予備知識として役立てて欲しい。

社会心理学　　小西啓史

本講義では、現代社会心理学の主要トピックスについて具体的な研究例をもとに解説する。主なテーマは以下のとおりである。

(1) 社会性の発達

社会性はどのように身についてくるのか。その起源としての母子関係の成立について。

(2) 規範の成立と規範からの逸脱

集団規範はどのようにしてできあがるのか。常識とは何か。もし、常識に従わなかったら。

(3) 同調と服従

なぜ自分の考えを主張せず他人に合わせようとするのか。権威からの命令には逆らえないのか。

(4) 援助行動

なぜ困っている人を助けないのか。援助行動を抑制する要因は何か。

(5) 態度変容と説得

態度はどのようなメカニズムによって変わっていくのか。説得のテクニックは。

空間の心理学　　佐古順彦

場所と運動を結びつけるナビゲーションを説明する「認知地図（cognitive maps)」の理論や、場所と行動を結合させる。「行動場面（behavior settings)」の理論をとりあげて、人間の空間利用の特徴を考える。

環境色彩論　　齋藤美穂

環境の構成要素である色彩は、言語としての役割を持ち情報の伝達手段として環境に働きかけるのと同時に、感情等の心理学的側面に働きかけさらに美的表現手段としての役割も果たす。本講ではこの色彩と環境との関わりを理解するために、1）色彩の知覚に関わる生理学的メカニズムや物理光学的特性、2）色彩心理学、3）環境における色彩の役割を中心に論じる。色彩心理学では色彩がもたらす感情効果や色彩嗜好および色彩調和、さらに色彩とパーソナリティーとの関わり等についても触れる。

環境生理学　　宮崎正己

人間の生体は、その外界が変化した場合、生体内の諸機能を調節し、その環境の変化に対して、順応あるいは適応しようとする。これは、生体の個々の機能の環境の変化に対する意味合いをもっている。本授業では、具体的な身の回りにおきる事例を挙げながら、人と環境との関わり合いについて人の機能を中心として理解を深めることを目的とするもの

である。

比較福祉論（本年度休講）

社会福祉論　　児玉幹夫

本年度は「生活と福祉と人間科学」をテーマに講義する。

Ⅰ．生存権と社会保障制度

Ⅱ．生活構造と社会福祉の諸分野

1．生活水準と公的扶助、2．家庭生活と児童福祉、3．生活の質と老人福祉

Ⅲ．社会福祉援助技術

1．　ソーシャル・ケースワークとパーソナリティ論

2．　ソーシャル・グループ・ワークと小集団論

3．　コミュニティ・ワークとネットワーク論

4．　ソーシャル・アドミニストレイションと組織論

Ⅳ．現代社会福祉の動向――地域福祉の展開

福祉原論　　岡野静二

社会福祉とはなにかを、社会学と心理学の知識をもとにして根本的に考えてみたい。そして、教育と福祉とのかかわりについて現代的視点でとらえたい。

1．社会福祉の考え方

2．家族福祉の問題

3．母子福祉について

4．児童福祉と高齢者福祉について

5．都市と農村と福祉

生涯教育論　　瀬沼克彰

本講は前半で生涯学習の実践やニーズなどの解明からはじめて、地域における活動状況、民間企業、大学などの提供実態を解説する。後半には、日本の生涯学習の新しい推進方策について、捉い手、場、条件、支援者、連携などについて講義したい。

授業計画

1．授業のねらいと進め方

2．個人としての取り組み

3．学習ニーズを把握する

4．地域の活動状況

8．生涯学習の捉い手

9．活動の場づくり

10．促進のための条件

11．支援者づくり

5. 新しい事業の台頭
6. 新しいシステムの導入
7. 前半の授業のまとめ
12. 連携づくり
13. 後半の授業のまとめ
14. 全体のまとめ

テキスト使用（第一回授業の時に指示）

受講者へのメッセージ。中間と期末に試験を行う。授業はハイスピードで行なうのでやる気のある学生を歓迎する。

高齢社会論　濱口晴彦

「寿命は近代化に直接的に関連する」という仮説は、高齢社会のエンジング（aging）現象として受け止めるとすればどのように説明することができるだろうか。あるいは、このことは「近代化社会では女性の割合、とくに未亡人の割合が高い」という仮説とどのような関連があり、そのことをどのように説明できるだろうか。「近代化にともない高齢者の経済的保障は家族から国家に移った」という仮説は妥当なのだろうか、などについて、21世紀的なテーマである高齢社会について、この社会に生きることになる人びとの「生きがい」をふくめ講義する。

老年心理学　大橋靖史

高齢者の抱える問題を考える際には、老人の心理の特徴を知ることか重要である。本講義では、老人の認知、言語、人格、生きがい、老年痴呆、死の問題など、多角的な視点から老人の心理について理解を深めることを目指している。内容的には、基礎的な実験・調査研究の知見にとどまらず、老人の日常生活をとらえた学際的な研究や臨床的な研究についても随時触れていく予定である。本講義を通じ、心身の衰えた老人、孤独な老人といったスチレオタイプな老人観から脱して、多様な高齢者像に接近していきたい。

看護学　菱沼典子

看護という現象また職業としての看護は、古くからある人間の営みの一つであるが、看護学は比較的新しい学問分野である。人間の成長発達に伴う心身の変化により生活様式が変わるとき、疾病の予防を目的として生活を変更するとき、病いによって日々の営みを変更せざるをえないときに、その個人や家族、あるいは所属する社会集団がその変化を受け入れて、いかにＱＯＬを高めていけるか、その過程を共にするのが看護である。

本コースでは、看護の実践を支える援助技術の研究に触れながら、多様な看護の現象を概観し、また、看護に対する社会からの要求に答えていくための看護学の課題と方向性を検討してみたい。

リハビリテーション　　比　企　静　雄

人間の感覚機能や運動機能に一時的あるいは長期的に起きる障害に注目して、検査・診断の手法や、機能の修復・代行の可能性や、機能回復訓練の効果について、基礎的な知識を解説する。あわせて、検査・診断に使われる機器や、機能の修復・代行のための補装具や、機能回復訓練のシステムなどについても、技術的な進展を紹介する。さらに．リハビリテーションのためのこれらの医療技術の開発と、障害児の教育環境や障害者の支援体制との係わりについても問題点を指摘する。

具体的な材料としては、視覚障害および聴覚障害を取りあげる予定である。

また、これらに先立って、リハビリテーションの基本的理念についても、ＡＤＡ（The Americans with Disabilities Act）などを例にとって、様々な角度から検討する。

なお、この講議は人間科学部の3学科から共通に選択できるように、内容を設定してある。2年次と3年次を対象にしている。

法　　学　　世取山　洋　介

憲　　法　　世取山　洋　介

産業・職業社会学（本年度休講）

余　暇　論　　長　田　攻　一

「余暇」という概念の社会的意味は、社会の歴史とともに変化してきた。本稿では、生産力の発展に対応する社会の変動過程を踏まえた上で、世界における労働時間短縮の略史、余暇（ないしレジャー）と労働の社会的意味の変化を簡単にあとづけ、消費社会、脱工業化社会、情報化社会と呼ばれる今日の社会において、余暇がどのような意味を帯び、われわれに対してどのような対応を迫りつつあるのかについて考えてみたい。とくに、現代日本の労働時間短縮、リゾート開発、広告とレジャーの関係などのトピックに焦点を絞りながら、現代日本社会の余暇（レジャー）をめぐる問題点を考察してみたい。

参考文献などは、教場でその都度指示する。

セラピューティック・レクリエーション論　　吉　村　　正

セラピューティック・レクリエーション（Theraputic Recreation 以下ＴＲ）は、日本語では、治療的レクリエーション、あるいは、福祉レクリエーションと呼ぶ。

ＴＲの目的は、身体的、精神的、情緒的あるいは社会的制限を持っている人々のために適当なレジャーやレクリエーションのライフスタイルを開発し、維持し、拡大していくこ

とにある。ＴＲは、レジャーやレクリエーションへの参加を妨げている障害を少なくすること、また、レジャーやレクリエーションへの技術や態度の向上を図ることなどを援助する専門的なプログラムを通して行われる。そのサービスは３つの領域に分けられる。それらは、「レクリエーション・セラピー」「レジャー・レクリエーション教育」「レジャー・レクリエーション参加」である。

以上の内容を様々な角度から論じたい。

職場体育論　　前田勝也

職場体育といっても、一般にはあまり聞きなれない言葉かもしれない。総括的に考えれば、レクリエーションということになろうが、ここでは、仕事を持つ人々の職場における状況を、人間に加わる負担という形でとらえ、それらからの人間への影響、さらにその影響に対応する意味でのレクリエーションの問題について考慮を進める。

つまり当科目は、レクリエーション活動の必要性や活動形式を探るための基本的部分の理解を目的としている。

観光レクリエーション論　　丸山克俊

ここでは、レクリェーションを「余暇のうまい利用（wise use of leisure time)」と規定したい。そして、余暇を善用することによって、健康づくりや仲間づくりに寄与する社会形成的なエネルギーとしてのレクリェーションについて考究したい。

一方、日常生活圏から離れて移動性余暇を求める行動の一つとして“観光’がある。

レジャー社会とストレス社会が共存している今日、本講義のメインテーマである「観光レクリエーション」とは、余暇を楽しむことによってストレスを解消し、“個性あるレジャー”を実現するものでありたい。

本講義では、私たちの身近にある「観光レクリエーション活動」を企画、運営する具体的な方法論について考察する。事例としては、主に「旅行とスポーツ（Tourism and sports)」を取り上げたい。実践知・体験知を中核としたスポーツ（レクリェーション）教育学的視点からの講義となる。

ジェンダー論（本年度休講）

臨床と文化（本年度休講）

文化心理学　　茂呂雄二

人間のこころの営みは、生まれ付きの固定したものではなく、文化、社会、歴史によっ

て複雑に媒介されている、このことを強調する心理学の研究領域が、文化人類学である。

この授業では、文化心理学の基礎を学ぶ。とくに、言葉、道具の使用、共同の問題解決を取り上げながら、文化による媒介のさまざまな姿を、具体例に沿って検討していく。

考　古　学　　谷　川　章　雄

考古学は人間とモノとの関係を読み解く学問である。

本講義では、まず、明治から昭和にかけての数人の日本考古学者をとりあげ、その人と学問を概観するなかで、考古学の歴史と方法を明らかにする。次に、近年資料が蓄積されつつある近世都市江戸の発掘調査の事例をもとにして、江戸の物質文化のあり方をみることにしたい。

発掘調査にはじまり、資料を分析し、人間とモノとの関係を解読する考古学の視座を学ぶことが本講義の目的である。

先　史　学　　高　橋　龍三郎

人類が東アフリカの一角に登場したのが、今から400万年前のことである。以来、人類は形質的な進化と自らの文化的適応によって、多様な自然環境を乗り越え、現在では人跡未到の地は無いといってよいほどに、広範に拡大している。人類のもつ文化的な適応力の逞しさを知ることができるが、しかし、人類の文化や世界の歴史について明確な古記録で辿れるのは、たった5000年ほど前になってからである。それ以前の出来事は文献記録に書き留められることもなく、歴史の闇の中へ消えてしまった。なんと人類史の99．99％は文字記録をもたない無文字社会であったのである。講義では、名もなき人々が活躍した先史時代・文化に接近するための諸方法論や、日本の縄文時代に関して近年の成果について扱う。あわせて文化とは何かという、根本的なテーマについても人類学や民俗学の成果を援用しながら考えていく。

日　本　民　俗　学　　谷　川　章　雄

日本民俗学は無名の日本人の歴史、心性を明らかにする学問である。本講義では、まず、柳田国男・析口信夫・南方熊楠の学問と思想の概略をたどるなかで、民俗学のものの考え方に触れてみる。次に、具体的に沖縄の民俗文化をとりあげ、その歴史・文化の諸相をみることにしたい。

多様な民俗文化の世界を読み解いていく日本民俗学の思想を学ぶことが本講義の目的である

宗教学　　鎌田東二

「宗教学」(science of religion history of religion)は、１９世紀後半にヨーロッパにおいて成立した若い学問である。宗教学の父と呼ばれるマクス・ミュラーは、「宗教学とは、世界中の諸宗教を、自然科学の方法を用いて真に科学的に研究するもの」と定義し、それは、(1) 諸宗教の事実の収集、(2) 諸宗教間の比較、(3) 宗教の起源・本質・目的の解明の三つの段階を持つという。最初期の宗教学は、みずからの学的特質を信仰弁護的な神学とも、思弁的な哲学とも異なる「価値中立的」なものと位置づけた。しかし宗教学がどのような意味と方法において「科学」であるかが問われねばならない。いずれにせよ、価値中立的かつ客観的な「科学」であることをめざした宗教学は、実証性と比較を重要な方法的旗印とした。その意味で、宗教学とは本質的にも方法的にも「比較宗教学」として成立してきたのである。本授業ではできる限り広く、世界の諸宗教を紹介しながら、その特質を「比較」の方法と観点から明らかにしてみたい。

(1)宗教の発生と文化・文明の発達、(2) 原始宗教文化――アニミズム、トーテミズム、シャーマニズム、(3)部族宗教、民族宗教、世界宗教、(4) 多神教と一神教、(5) 宗教類型論と宗教進化論、(6) ユダヤ教、(7) キリスト教、(8)イスラム、(9) 仏教、(10)儒教、(11)道教、(12)神道、(13)バリ島の宗教、(14)ケルトの宗教（ドルイド教)、(15)ネイティブ・アメリカンの宗教、(16)日本の宗教

教科書『宗教と霊性』鎌田東二、角川選書、1995年

文化人類学　　蔵持不三也

文化人類学の基礎的な理論や方法論を考察する。資料は講師が用意する。スライド・ＶＴＲ使用。参考文献は教場にて紹介。

社会開発論　　店田廣文

本講義では、社会開発の歴史的変遷を、その概念の形成、社会発展論との関係についてふれながら、まず明らかにする。その後、社会開発計画のサイクルについて、社会科学が関与することの大きい領域を中心に、取り上げる。それらは、事前評価、監視、事後評価などであり、それぞれのステージにおける、社会科学の貫献のあり方や方法について論じていく。参照文献は、随時提示する。

比較文化論　　吉村作治

人類500万年の歴史と言われるようになった。人類の起源はナイル川の源流点付近のグレイトバレー地帯である。通常旧石器時代を経て新石器時代、そして先王朝期へと移行したと言われているナイル文化だが、その起源は現在も尚確定していない。本講座は前期の

エジプト文明論と対をなすもので、その起源をナイル川上流に求めた理論の上に立っている。言語学的、民族風習論的、食文化論的など各論的観点から観た文化論である。文化を考える上で最も重要なことは形象として認識できるということである。そこで本講座ではビデオ映像を使用し、その教材を基に論を進めていこうと考えている。ナイル川上流のナイロート諸民族の風習、文化を通じて古代エジプト文明の基礎となる文化の種がわかることができればと考えている。

アジア文化論　　矢　野　敬　生

本年度はとくに「島嶼部 東南アジアの社会組織」をテーマとしてとりあげる。私たちにとって実は身近な国々でありながら、一般的には知られざる存在でありつづける東南アジア社会に焦点をあてて、社会人類学の立場から論ずる。本講義では東南アジアに関する主要な著作や論文（外国語を含む）を読んで各自に発表してもらい、かつ積極的に討論に参加してもらうつもりである。

イスラム社会論　　店　田　廣　文

現代エジプトの都市社会の変動を、1960年代以降の大都市の事例を中心的に扱いながら、以下の柱に沿って取り上げていく予定である。可能な限り、実証的データや調査資料を使いながら、アプローチする。

都市的居住、都市の産業と職業、消費文化と情報化、宗教運動、人口変動、高齢化、都市的生活様式などである。参照文献は、随時提示する。

エジプト文明論　　吉　村　作　治

古代文明の中でもエジプト文明は特長のあるものとして知られている。ナイル川というたったひとつの水源を人々がいかに重要視したかは、ギリシアの歴史家ヘロドトスが、「エジプトはナイルの賜物」と言ったことでもわかる。そして古代社会の中で、自然の中から神を見い出し、来世という概念を創り出し、人々の再生復活を信じそのためにあらゆることを行った。そんな文明をになった人々の生活と考え方を検証していきたい。私自身すでに30年間エジプトと関ってきて、いまだにその全てを解明できずにいる。そんな奥の深いエジプト文明をビデオを中心に地中海からヌビア砂漠まで遺跡を追いながら考えていくというのが当講座である。紀元前7000年から紀元後600年までの約7600年の間にくりひろげられた文明を半年かけて概観していく。尚同時に早稲田大学のエジプト調査についても諸君に知ってもらうという趣旨が入っていることをつけ加えておく。

ヨーロッパ文化論（本年度休講）

スポーツ史　　寒川恒夫

スポーツの起源から今日に至る発展史を、未開社会、古代、中世、近代、現代、にわけて講義する。参考書には『図説スポーツ史』（朝倉書店）を使用する。

武道文化論　　志々田文明

この講義では、次の三点の主題を中心に行う。第一は、現代に生きる主な武道を概観する。もとより各種武道には長い歴史があるので、ポイントを絞って行いたい。第二は、日本文化の特色の一つといえる「型」と武道との関係について考えたい。第三は、武士道思想と民主主義の問題の三点を中心に考えたい。武士道思想も中世と近世とはかなり異なる。より自由な中世の倫理に対して、「献身の道徳」といわれる近世の評判は、最近ではかなり悪い。にもかかわらず、近世の月並みな教えの中には、今日のわれわれが学ぶべきもの、つまり現代人に欠けている貴重な教えも多い。こうしたものにも光を当ててみたい。
（参考文献：『日本史小百科・武道』（東京堂出版）、『型と日本文化』（創文社）、『武道論』（大修館書店））

科学史　　松原洋子

科学誌研究は、現代の科学技術社会を分析する上で不可欠の知的戦略である。この講義では、科学社会学、科学技術論、カルチュアル・スタディーズをも視野に収めつつ、ＤＮＡ研究をめぐる様々なトピックスを素材として、現代科学技術社会のテクノ・バイオポリティクスを考察する。

芸術論　　柏　健

○　一人の作家の立場から自分自身の作品を制作することに関する考えと技法（スライド使用）
○　私が興味を抱いている現代の作家達が持つ問題（スライド使用）
○　油絵とデッサンについて（スライド使用）
○　画用紙と鉛筆によるデッサンの実技と講評

文学　　菊地　弘

日本近代の短編小説、ときには長編の一部をテキストにして、人間の《生きる意志》とはどのようなものなのかを《信と不信》を、メルクマールにして考察したい。本年は国木田独歩、夏目漱石、芥川龍之介、堀辰夫、梶井基次郎、太宰治、大岡昇平、三島由紀夫な

どの作品を、ときに日記、書簡などもまじえてとりあげる。芸術世界と現実との関係性、当代、後代の作品との関連などにもふれてみたい。芸術を通して豊かな感性を養うことを願っている。テキストについては、そのつど、プリントにして配布する。なお最初の授業でスケジュールを話す。

音　　楽　　上尾信也

『楽師伝説』と題し、音楽作品や作曲家を通して音楽史を見るといった従来の「音楽」のとらえ方ではなく、それぞれの時代や社会において音楽あるいは音がどのような「イメージ」でとらえられていたかを考察する。具体的には、前近代の「ヨーロッパの森」で噂された音にまつわる伝説・伝承・物語の数々を、異界と現実、聖性と魔性の「音」による媒介者であった「楽師」を通して考察する。

人と音をつなぐ彼ら楽師への社会的な視線を、さまざまな歴史資料から読み説くとともに、楽師や音にまつわる道具立てや象徴機能を、たとえば楽器、キリスト教による「音」の利用、グリム伝説集における楽師イメージ、ヴァルトブルクの歌合戦伝説といったいくつかのテーマをもとに見ていきたい。

参考文献等は授業時に随時指示する。

美術史　　松枝　到

美術とは、語の起源をたずねるとギリシア語の「テクネー」やラテン語の「アルス」にたどりつくことからもわかるように「技術」の意であって、これに「美」が付け加えられるのは、ごく最近のことであるにすぎない。しかも現代は、あらためて「美的なるもの」に疑問符をつけなおし、根源的な問いにかけようとしている。この講座では、歴史的に昨品や作家たちの系譜をたどるということを目的とせず、従来の美術にたいする歴史観を問い直すことで、多様な歴史観にたいする批判としての美術史を考えてみたいと思う。したがって、かならずしも美術作品を題材とすることはなく、神話・哲学・民俗・文化を総合的に講ずることになるだろう。必要な参考文献はそのつど指示する。

表現史　　松枝　到

人間のあらゆる行動は、それを意図するとしないとにかかわらず世界に向かってのなんらかの表現であって、ふかく人間の言語活動や精神活動に呼応するものである。ここでは、こうした行動の中核にひそむ想像力の運動に焦点をあて、その多様な可能性と問題点を抽出していきたい。その対象はきわめて多岐にわたることになるだろうが、できるだけ実際的な素材（文学作品、映画、音楽、その他）を使って分析を試みてゆきたいと思う。また「表現」なるものの理解には、個々の実際的経験が媒介にならなければ観念的な理解にと

どまらざるを得ない。したがって、時に参加する学生諸君になんらかの発表を要求することになるので、そのつもりで受講してもらいたい。

演　　劇　　上尾信也

近代の西洋演劇が成立するまでの過程を、とくに、演劇を中心とした芸能とその社会での役割について概観していく。中世世界において、近代でいう芸術演劇といったジャンルはなく、種々様々な芸能が見世物や娯楽として混在していた。これらの芸能の担い手をファラルのいう「余人を楽しませる職種の人々」である「遊芸人」ととらえ、中世の遊芸人の社会と文化を、ローマから15世紀までの地中海世界を舞台に歴史資料をもとに跡付けていく。演劇的な要素とその担い手である遊芸人・役者は、単に芸能活動を行なっていただけではなく、中世においては宗教的儀礼の担い手といった象徴的機能をもつとともに、情報伝達者であり、またそれ故政治的活動にも関わっていた。これらの状況もふまえて演劇さらには芸能の「在り方」についても考えてみたい。

参考文献等は授業時に随時指示したい。

映　像　論　　奥村　賢

20世紀は映像文化が大きく花開いた時代である。ことに現代では、いたるところに映像が氾濫し、それぬきには日常生活も成り立ちがたくなってきている。映像が人類にもたらしたものは何か？今日、原点にかえってもう一度、とらえかえしてみる必要があろう。

今年度は映画理論の解読をとおして映像の意味を考えていきたい。受講を希望する者は、美学的な問題を議論の中心にすえるので、教場は思索の場になるということだけは、あらかじめ頭に叩き込んでいてもらいたい。参考文献はおりにふれ紹介する。また、こちらがわで用意できる資料があれば、教室で配布するつもりである。

舞　踊　論　　杉山千鶴

現代の日本においては、日本独自の伝統芸能や民俗芸能、西洋から移入した舞踊、多種多様な民族文化の見直しによりクローズ・アップされたエスニック・ダンス、舞台上演を前提としないストリート系のパフォーマンスなど、様々な舞踊文化がひしめくように開花している。本講義では、これらの舞踊、即ち劇場芸術とされる舞踊、そして劇場外で行われる舞踊として風土や生活と密着した民俗芸能やパフォーマンスなどの諸形態を知る。さらに、その舞踊文化を取り巻く背景についても言及する。

［参考書1：舞踊教育研究会編『舞踊学講義』（大修館書店）

武　道　論　　志々田　文　明

西洋に生まれたスポーツが日本に輸入されると、どこか変わった日本的なスポーツに変質されるといわれる。スポーツの文化変容という現象である。ここには、受け入れる側である日本社会の慣習、日本の自然・風土、日本人の思考法など、日本の文化と自然が影響していることは間違いない。日本武道もまた、そうした文化の一つであり、外国の文化を変容させる文化的装置の一つであった。

この講義では、私たち日本人の生き方や考え方になお影響を残している日本武道の思想と、武士道の思想をあらわしている古典的文献に直接触れて、そこに現れた思想の理解と今日的意義を考えたい。

遊　戯　論　　西　村　清　和

「遊びとは何か」という問いは簡単なようで、じつはむつかしい。遊びという現象は、きわめて多様であり、それゆえ遊びという概念も曖昧である。ホイジンガやカイヨワにしても、遊びが仕事とくらべて「なにでないか」には答えても、そもそも遊びという行動が他の人間行動とことなったいかなる独自性を持っているかについて、教えるところは少ない。しばしば遊びと芸術と儀礼とは、その非現実性、非日常性という点でも、またそれらの文化史的な起源という点からも、本質的には一つのものと考えられてきた。だが子供のごっこあそびと俳優の演技、そして呪術行動が、行動の実質という点でおなじものとは考えにくい。遊ぶ主体の経験に即して、さまざまな遊び行動の独自性や、他の行動との違いをできるだけ単純な形で分析し記述することが、本講義の主眼である。

教科書には、『遊びの現象学』（西村清和著、勁草書房）を用いる。

環　境　芸　術　　野　呂　影　勇

一般に、環境芸術とは、自然環境そのもの、あるいは自然環境に人工的なモノを共存させ、アートとして提示するものである。

本講義では、自然環境、自然科学、科学技術を含む、人間をとりまく広範な［環境］から、アートを見い出すものとして、環境芸術をとらえる。講義は、次の４名により行う。

講義の具体的な内容

1）環境芸術入門　野呂影勇

2）自然環境・オーソドックスな環境芸術論
　龍村　仁（映画監督）

3）科学技術、新しい芸術表現
　渡辺　浩弐（ハイテク評論家）

4）映像芸術と哲学

原　章二（政経学部）

生涯スポーツ論　　竹　中　晃　二

近年、我国では、子どもから大人、そして高齢者が生涯を通して行え、しかも勝敗にこだわらないで健康作りや楽しみを目的とした「生涯スポーツ活動」が奨励されてきた。これら生涯スポーツは、文部省を中心とする官主導のスポーツ奨励活動として発達してきたものの、いまや個人や友人同士で行う運動・スポーツ活動や地域の公的施設を中心としたスポーツクラブの他に、会員制アスレチッククラブの発展など、概念そのものが多様化してきた。特に会員制アスレチッククラブにおいて行われている個人の体力に応じた運動処方は、ストレス社会に生きる勤労者に人気が高く、身体の健康作りのみならず心の健康作りにも大きく貢献している。

生涯スポーツに新しい視点も必要になっている。たとえば、高齢者にとってスポーツを行う意味は、人生の充実感とも言えるQuality of Life（生活の質）の向上の他に、自分一人の力で生活を営んで行くことができる体力、すなわち生活体力の維持である。高齢化社会の先進国である米国の高齢者は、ウオーキングやジョギングなど有酸素運動ではなく、従来高齢者には危険とされてきた筋力トレーニングを行うようになってきている。この現象は、自立意識の必要な高齢者が、日常の生活を自分自身で行えるだけの筋力の必要性を実感していることを示しており、高齢化社会を迎えようとしている我国の生涯スポーツ推進活動に指針を与えていると言える。

本講義では、生涯スポーツの必要性を、単に社会体育の範疇で捉えるのではなく、心理的•生理的•社会学的観点から議論する。また、総合的な体力測定を行い、受講者の問題意識と理解を深める。主な講義内容を以下に示す。

1.生涯スポーツ活動に対する疑問
2.ヘルス•プロモーションという考え方
3.運動すると長生きするの？
4.行政施策と産業スポーツ
5.突然死、過労死が意味すること
6.ストレス時代の健康作り
7.身体運動の心理学
8.ライフスタイルの変容
9.アウトドアライフ時代の到来
10.運動adherenceを高める試み－自己効力感－
11.競技スポーツの諸問題
12.体力測定

評価方法:1）体力測定への参加と結果レポート、2）グループごとのアスレチック・クラブの訪問レポート、3）筆記テスト、4）小レポート、5）出席点

コミュニティースポーツ論　濱野吉生

地域社会における体育・スポーツの進め方、法的根拠、歴史と現状などについて、諸外国の例も交えながら述べていくが、なおその他にスポーツそのものについても、かなりのウエイトを置いて言及する予定である。

参考書等については、授業中に指示する。

スポーツ環境論　池原義郎　葛西順一　比企静雄　宮内孝知

若年者から高齢者まで、アマチュアからプロフェショナルまで、観衆から競技者までの広い意味でのスポーツの活動を、実施したり支援したりする環境には、自然の条件や人工の施設などの物理的な環境と、社会の体制や個人の生活などの人間的な環境の両面がある。これらのうちで、この「スポーツと環境」では、とくに次のような項目について、複数の講師が一連の講義をする。

1）スポーツの競技や練習のための各種の施設について、必要となる構造と機能を、建築工学的な観点から、実例を参照しながら解説する。
2）スポーツで使われる競技・練習の用具や測定機器について、その使用方法や使用効果の問題点を、人間工学的な見地から検討する。
3）スポーツ・パフォーマンスとこれに多大な影響を与える環境要因、例えば気温、水温、気圧等の変化との関連をスポーツ方法学的な見地から検討する。
4）スポーツには社会的環境が存在する。スポーツのより深い理解には、個人・集団・組織等を中心とする様々なそれら環境の検討が必要である。

スポーツ教育論　高橋健夫

スポーツ教育論では、主として次のような疑問に答えようとする。

1. スポーツはどのような過程を経て、学校教育に導入されるようになったのか。
2. スポーツをすべての人に教育する意義はあるのか。
3. スポーツ教育はどのような人間を形成しようとするのか。
4. スポーツ教育では何を指導し、学習するのか。
5. どのようなスポーツが価値をもつのか。

6. どのような方法によってスポーツ教育の目的は達成されるのか。
7. スポーツ教育指導者に求められるものは何か。
8. よりよいスポーツ教育を実現するために、どのような研究が必要か。

スポーツ行政論　　深　川　長　郎

1. スポーツ行政の役割についての概説
2. わが国のスポーツ行政組織と体制。(国および地方)
3. 公民連携のスポーツ振興の役割論
4. 関連法規、条令等と行政執行上の留意点
5. 世界のスポーツ組織と行政のかかわりについて
6. オリンピック憲章、アジアオリンピック評議会憲章、国際大学スポーツ連盟憲章等とこれに関連する行政上の留意点
7. わが国の国政、地方両面にわたっての施策と行政のしくみ。

以上の分析、紹介から現状の課題を考案して見る講義内容とする。

(参考) 教育六法 (三省堂)、体育・スポーツ指導実務必携 (ぎょうせい)

スポーツ情報論　　加　藤　博　夫

現代、の社会現象の中で、スポーツに関する情報の占める割合は年々拡人し、加速化している。スポーツ情報の発生と変化、それを伝達するメディアの仕組みと実態、そして情報が社会に与える影響など、スポーツと情報のかかわり合いを、次の項目で考えてみたい。

①スポーツ情報とは何か (情報源―伝達者―受け手)
②メディアの種類と伝達の歴史
③情報の変化と国際化 (活字―電波―衛星同時中継)
④情報の発達と付随する諸問題 (政治介入、商業主義、テレビマネー)
⑤プロ・アマ問題と情報
⑤情報の分析と新聞の読み方
⑥報道の仕組みと実態 (オリンピック取材を例に)
⑦情報の集め方とまとめ方 (記録と記事)

スポーツ産業論　　宮　内　孝　知

平成7年度の余暇市場はおよそ85兆円であり、その約6. 7%にあたる5兆7千億円がスポーツ部門である。「パチンコ」の市場が24億円といわれる中で、この数字が大きいものであるか、そうではないかの判断は分かれるものであろうが、通産省は21世紀の基幹産業の一つとして「スポーツ産業」を挙げている。その規模は21世紀初頭で15兆円規模になる

と予測している。

本講義では、「スポーツ産業」とは何か、「スポーツ産業」はいかに如何にあるべきか等の問題を基本におきながら、その市場構造や市場行動等を講じる予定である。

スポーツマーケティング論　　柳　沢　和　雄

スポーツの普及や発展に寄与することをねらいとしたスポーツマネジメントの理論のひとつにスポーツマーケティング論がある。スポーツの発展は、“行うスポーツ”にせよ“観るスポーツ”にせよ、スポーツの機会や空間への参加と参与を前提としている。その参加や参与を促すために、経営体や競技団体は多様なマーケティング活動を行っている。本講義では、商業スポーツ施設経営やスポーツイベントのマーケティングを事例にしながら、スポーツマーケティングの考え方や技術について、その基礎理論や課題等についての理解を深めることを目的とする。

主要な講義内容は、スポーツ産業とスポーツマーケティング、スポーツマーケティングの構成要素、スポーツ市場分析と商品開発、スポーツプロダクトの価格戦略とプロモーション戦略等である。

社 会 調 査 法　　宮　内　孝　知

社会科学が扱う社会現象を把握するには、要因の人為的統制や刺激の人為的導入が不可能ないしは極めて困難であることから、実験を行なうことは希であり、調査が主要な研究方法となる。本講義では、社会調査を概説するとともに、質問紙法を中心にその方法を論じる予定である。なお、スポーツ社会学演習選択者はできるだけ2年次に選択すること。

民族スポーツ調査法　　寒　川　恒　夫

伝統的社会における民族スポーツの調査法（フィールドワーク法）について学ぶ。対象フィールドは日本を主とするが、必要に応じ外国をも扱う。授業は講義形式で、資料はそのつど配布される。ビデオや写真・標本等視聴覚教材をしばしば用いる。

人 体 の 構 造　　白　間　一　彦

人体はもともと1個の細胞（受精卵）が分化・増殖することによって形成された固体である。固体としての人体の構造を理解するためには、先ずこの細胞の分化過程を会得することが大切である．ヒト発生第3週には第2週で形成された胚盤から3層の胚葉（内、中外胚葉）をもった胚子が形成される。例えば、骨、軟骨及び筋肉等いわゆる身体を支持する組織は中胚葉の間葉細胞に由来するが、骨折の際には患部近傍の骨膜に存在するこの未分化間葉細胞が骨芽細胞そして骨細胞へと分化・増殖し、骨析部を修復する．また、急な

大量出血の際には肝臓の類洞（間質）にある間葉細胞が造血細胞に分化するが、これは原始血液細胞や血管が間葉細胞に由来すること、肝臓が胎生期に造血器官であったことから当然ともいえる．人体の構造をこのように発生学との関連で理解を深めてもらう．また、臓器や組織が体液性物質や神経によって調節されていることについてもふれたい．

身 体 形 態 学（解剖学を含む）　　加　藤　清　忠

ヒトのからだは「小宇宙」であると言われるように、複雑で難解なものであるが、本講座では進化の道筋を通してからだの歴史を辿るという「原形形態論」の観点から、その理解を少しでも深めていきたいと思う。したがって、中心テーマとなる骨や筋の運動器官系も、上記形態論の一側面である比較解剖学的立場から話を進めることになる。また、からだの基本の構造やロコモーション等についても人間的特徴という観点から概説していきたい。更に、われわれの「すがた・かたち」の問題（特にプロポーションや姿勢）に関しても言及するつもりである。

なお、テキスト・参考書については、授業中に指示する。

スポーツ栄養学　　太　田　冨貴雄

スポーツ選手が優れた成績をあげるためには、合理的で効率のよいトレーニングを規則的に行い、体力と技術及び精神力の涵養に努めることが最も重要であることは言うまでもない。一方、激しい長時間の身体活動は、エネルギー代謝が高まるだけでなく、骨格筋などにおけるタンパク質の異化亢進も引き起こす。したがって、次の活動に備えて、エネルギー源の補充と筋修復・肥大に必要な各種栄養素を十分に摂取しないと、体力の向上はおろか低下を招くことさえあり、折角トレーニングにより獲得した運動能力を最大限に発揮できない結果におわる。このように、栄養はスポーツ活動にとって物質代謝の面から身体を支える働きをするので、激しい身体活動を日頃行う人は日常はもとより、トレーニングや試合に備えて目的或いは状況に応じた栄養摂取、即ち、食物補給の質、量、タイミングについて注意を払う必要がある。この講義では、身体活動時に伴う物質代謝の変動、炭水化物と脂肪の運動時における役割と特徴、アミノ酸・タンパク質の生理的役割と摂取のタイミング、身体活動におけるビタミン・ミネラルの役割、食品中の運動能力向上性物質及びドーピング、など栄養と運動の関係について原則並びに応用の両面から述べる。なお、本科目を聴講するにあたって基礎栄養学を受講しておくことが望ましい。

メンタルトレーニング論　　児　玉　昌　久
竹　中　晃　一

メンタル・トレーニングとは心理的スキル訓練を意味し、特にスポーツ分野のトピック

として取り上げられることが多くなった．メンタル・トレーニングの効果は、パフォーマンス向上やリラクセーションの獲得に求められることが多いが、その科学的根拠は必ずしも明確とは言えない。そのため、本講義では、メンタル・トレーニングを行うことで何ができて、何ができないのかを明確にし、実践的でわかりやすい内容の講義とその応用的な実習を行う。

本講義は2名の教員が担当し、スポーツにおける心理的スキル訓練の必要性を、その二ーズと共に議論する。そのため、受講生には多くの資料収集とそれらのまとめの作業がホームワークとして付加される。またこれらの内容を競技選手に実際に適用することで、効果を確認し、プログラムの作成を行う。受講生は、以上の多大な作業を行うことが単位修得の前提条件であり、しかも講義内容をテストによって評価される。そのため、怠惰な学生は本講義には不向きである。その点を十分考慮した上で履修の可否を検討願いたい。

スポーツ工学　　比　企　静　雄

スポーツという対象に適用される工学的な研究の手法は、多様な学問分野にわたっているが、この、「スポーツ工学」では、まず、人体の内外から加わる力の作用を解析するために必要になる、生体工学あるいはバイオメカニクスの基礎的な概念を説明する。

そのうえで、計測工学あるいは情報工学の立場から、人間の運動機能に関与する体格・体力や動作の特性を記録して分類・評価するための、多面的な測定器具・機器・システムについて、取扱いの問題点を指摘する。

電子計算機の利用による、測定データの統計的な処理や、画像解析や、運動のシミュレーションのためのモデル化の手法などについても、所沢構内の計算機の環境で可能な具体例を紹介する。

2年次と3年次を対象にしている。数学や物理学の予備知識を必要としない。

運　動　学　　土　屋　　純

体育授業やスポーツトレーニングの現場では、教師やコーチは目の前で行われた生徒や選手の運動動作を観察して、行われた動きのどこに問題があるのか、どこが優れているのか、といった点を瞬時に分析・判断し、的確な指示を与えなければならない。

ここでいう運動学は、教師やコーチが運動動作を把握し、効果的な指導を行う際の拠り所となる理論を提供することを目的としている。したがって、スポーツ運動の指導・学習の現場が重要視されることになる。

本授業では、運動の技術とはなにか、運動の良否をどう判断するか、成長に伴ってどのように運動技能が発達してゆくのか、ある運動を学習するときにどのような過程をたどるのか、といった、運動学の基本的な問題について講義する。

運動制御論　　鈴木秀次

運動制御は、中枢からの指令と脊髄反射によって制御される姿勢と動きについての学問である。我々動物が合目的的な運動を行うためには、中枢神経系から目的に応じた運動指令を発するとともに、運動の結果が中枢神経系にフィードバックされて、反射的に調節されることが必要である。

ここではスポーツ活動中に起こる「動き」に関連する神経調節機構について概説する。具体的には、細胞膜の興奮、α運動ニューロン、ニューロン回路網、筋紡錘、アルファ・ガンマ連関、脳幹・脊髄の反射系、随意運動、小脳、大脳基底核、ＰＮＦ等について講義する。

運動処方論　　永田　晟

トレーニングと運動処方の違いを明確にして、それらの基礎的な運動生理科学と臨床的な健康科学の資料を提示する。そして人間改造の可能性を探り、健康と体力の保持増進の目標や指標を具体化する。そのやり方をトレーニング・ルームや演習室で実践して処方プログラムを身につけていく。特に最大酸素摂取量、一日の消費カロリー量、1日の摂取カロリー量の計測は重要である。

運動処方上、必須な ①運動内容（種類） ②運動頻度 ③運動強度の理論を教示し、個人のレベルに対応した個別的な処方箋作りの方法論を展開する。特に、一般成人が半健康人、成人病予備軍の健康体力のための処方が組み立てられ、“スポーツ・運動プログラマー”や“健康運動指導士”、“ヘルス・ケア・トレーナー”“スポーツ・インストラクター”と同様の能力が得られるように詳講し配慮する。特に運動負荷試験（ストレス・テスト）のやり方と評価法、それに基づく運動強度の設定は大切で、実際に体験してみる必要がある。

［教科書］：「運動の科学的基礎」（西村書店）

基礎栄養学　　太田冨貴雄

栄養学は、食物が発育・体力・疾病など心身の諸様相にどの様な影響を及ぼすかを解明し、健康増進を推し進め、さらには各人が潜在的にもつ様々な能力を最大限に発揮させるのに役立つ食生活の指針をつくることを目的にしている。本講義では、先ず、人間が生活活動を営む上で不可欠な食物成分（栄養素）の種類と栄養生理機能、それらの必要量、各種食品の栄養的特徴など栄養学の基本的事項について述べる。次いで、幼児期から老年期までの各年代における生理特性と栄養摂取のあり方、貧血、肥満、骨そしょう症などの栄養素の過不足により発病する病気の特質と予防・治療のための食事、生活習慣病（成入病）とよばれる糖尿病、高血圧、虚血性心疾患などの病態および食生活と発症の関係などにつ

いて概説する。なお、スポーツと食事・栄養関連の事項は、スポーツ栄養学の授業で紹介する。

衛　生　学　　町　田　和　彦

病気を治療する臨床医学に対し、病気を予防し、健康の維持増進をはかる学問として、衛生学、公衆衛生学がある。今日、この二つの学問は明確に区別できないが、歴史的過程からいって、日本では衛生学は環境衛生、感染症等実験室内でおこなう研究が多いのに対し、公衆衛生学は地域医療の緒問題（母子保健、学校保健、成人保健、精神衛生、産業衛生等）や人口問題、衛生行政等、直接地域住民の中に入り、健康問題の改良にとりくむ研究が多い。本学の衛生学では術生学を理解するためにまず医学の歴史と衛生学・公衆衛生学の医学の中に占める位置と重要性を学んだ後、環境衛生を中心にした講義を行う。

講義内容：予防医学の歴史、衛生学公衆術生学とは、感染症の疫学と予防（病原微生物とは、感染症の過去・現在・未来一なるべく最新の情報をまじえて講義）、身の回りの環境と健康（日内リズム、生気象、空気の物理・化学的性状、水質問題、住居環境、薬害・添加物）、地域環境一公害問題、地球環境（人口爆発、工業化と環境、放射能汚染）

衛生学公衆衛生学ともに授業はプリントとＯＨＰを主体とし、かなり内容量も多いのでこれらの内容に興味の無いヒトは登録を控えてほしい。

公衆衛生学　　町　田　和　彦

公衆衛生学は衛生学で一応基礎的な衛生・公衆衛生的な知識を身につけた学生が、実際に地域住民の中に入って保健指導をおこなううえでの重要な知識や方法論を身につけられるような講義内容をもつ。その意味では、公衆衛生学だけの選択はさけ、衛生学を必ず選択してほしい。

講義内客：疫学とは、健康のための運動とは、栄養と健康、人口統計と衛生統計、出生から死亡まで（人の生理と病気の現状・疾病の予防、衛生行政・医療制度と社会福祉）産業衛生

学　校　保　健　　坂　口　早　苗

学校保健は，保健管理と保健教育に大別される。保健管理は，主に学校保健法にもとづいて行われる管理活動であり，保健教育は主として学校教育法にもとづく教育活動である。

講義内容は，1. 学校保健概論　2. 健康診断　3. 小児に多い疾患　4. 長期欠席　5. 学校伝染病　6. 学校環境基準　7. 学校安全　8. 保健教育（性教育・禁酒教育・禁煙教育・薬物教育・死の教育）

精神保健概論　　児玉昌久

精神保健（mental hygiene,mental health）とは、精神的健康の維持・向上および精神的不健康の改善・予防に関する科学である。人間が精神的に真に健康であるためには、身体的にも社会的にも、そして精神医学的にも健康であることが必要で、それ故、精神保健とは、種々の医学関連諸科学のみではなく、心理学、社会諸科学等に立脚する総合科学として捉えるべきものである。

講義では精神医学や心身医学よりも、科学的な心理学に基づく行動医学的立場をとり、精神症状や精神身体症状を示す人と、そのような症状を示さない人との差異を、ストレス・トレランスを構成する価値観、態度などの人格的諸要因や対処法と対応させて考慮し、発症のメカニズムや予防策について考えてみる。

心身医学　　河野友信

精神身体医学は心身相関の生理と病理を解明し，その成果を臨床と疾病予防，健康増進などに活用することを目的にした学問である。物心二分論に根ざして進展した西洋近代医学の延長線上に構築された現代医学は，限り無く細分化の道を辿っている。そこでは細胞臓器や疾病が対象とされ，人間不在の医学・医療となっている。その反省から，現代心身医学は，bio - psycho - socio - eco - ethical _modelを掲げ，人間のtotal healthと幸福・安寧を追求することを目的として掲げている。

人体は約60兆の細胞より構成され，細胞は集合して臓器・器官・組織となり，脳によりホメオスターシス・ネットワークのもとに全体として調和的に機能するように仕組まれている。身体－脳－精神という一体の存在として，個と全体の調和のもとに内外の環境に適応しながら生活し生存しているのが，人間である。講義では，心身相関の生理と病理，ストレスとストレス性疾患などについて，特に臨床的側面を中心に取り上げる。最新の身体医学の進歩の知見もとり入れて紹介する。

医学心理学　　末松弘行

医学と心理学は密接な関係がある。医学が心理学を取り入れて、心理テストなどで診断し、心理療法で治療する。逆に、心理学は大脳生理学など医学的な方法論で心理機制を解明しようとする。したがって、「医学心理学」は解釈の仕方によっては、極めて膨大な内容を含むことになる。

そこで、この講義では、その中からトピックスとして、心と身体の関係を科学的に研究する心身医学を主として取り上げる。すなわち、まず、ストレスが心と身体に及ぼす影響とか、心身相関のメカニズムといった基礎的なテーマがある。次に臨床的に心身医学が対象とする心身症とは何かについて述べ、その代表的なケースを提示する。そして、その基

本的な治療法についても解説する。また、その関連において、性の発達心理学とか、死の臨床心理学などの興味深いテーマについても触れたいと思う。

精　神　医　学　　守　屋　直　樹

精神医学は、古代ギリシャのヒポクラテスにその源流をたどることができるが、現代の精神医学は以下の4つの貢献に端を発していると見ることができよう。

1. フランス革命時のピネルによる精神病者の鎖からの解放
   これは、ヒューマニズム的精神医療につながる。
2. 19世紀末のクレペリンによる精神病理学と疾病分類学
   精神症状学、精神科診断学につながる。
3. 19世紀末から20世紀初頭のフロイトによる精神分析の開発
   医師・患者関係への見方を開き、あらゆる精神療法のもととなった
4. 1950年代のあいつぐ向精神薬の開発

以上の歴史をたどり、精神医学の現在についての理解を得ることを目標とする。

精　神　医　学　　古　茶　大　樹

本講座では今日の精神医療全般についての基礎的な知識を習得することを目的としている。精神障害を理解する上で必要不可欠な用語と症候学の解説を中心に、診断学、分類学、各疾患の概論と治療について今日的な視点から論じ、さらに楕神医学の歴史についてもふれる。

単に精神障害を理解するのではなく、精神障害者を理解しようとする態度を学ぶ。内容は精神医学に基礎知識のない人でもわかるよう配慮する。

画　像　医　学　　永　井　　純

医師が患者を診療する場合には疾患を診断し治療するという二つの大きな行為が必要となる。診断行為は種々の科学的技術の進歩により100年程の間にめざましい進歩を遂げ、将来もその進歩は衰える事はなかろう。

人体を切り開く事なく、非侵襲的に処理し、その内部を観察したいというのは医師として疾患の本質に迫るための大きな夢である。X線の発見はその第一歩であった。その後、コンピュータ断層撮影（CT)、超音波検査法、放射性同位元素を人体に用いる核医学検査法などの登場と進歩、最近では、磁気共鳴現象を利用した画像診断法（MRI）も臨床検査に応用されるようになった。これらの検査法はすべて画像として可視化される。種々の画像検査の人体への応用について研究するのが画像医学であり、現代の医学においては画像医学無くして本質を論ずる事は出来ない。

本講義では画像医学の歴史、方法、原理、臨床医学への応用・役割について解説する。

救 急 医 学　　安 達 正 夫

救急医学の対象となる、さまざまな疾患についてそれらの発症機序および医療現場での治療の実際について、個々の症例を紹介しながら講義をおこなう。

救 急 処 置 法　　安 達 正 夫

我々が社会生活を営むうえで、他人に救急処置を実施しなければならない機会は少なからずある。そのような緊急時に、我々がまず行なわなければならない救急処置の実際について講義をおこなう。

臨床スポーツ医学　　福 林 徹

原則として前期にスポーツ医学を履修したものを対象とする。スポーツ現場で役立つような実践的医学が中心となる。具体的にはドーピング、スポーツ栄養、現場でのメディカルチェック、アスレチックリハビリテーションなどである。

保 健 社 会 学　　佐 久 間 淳

まず現代社会において生活の特徴にふれ，それらと健康，疾病（成人病など）との関係を説明する。ついで日本の医療社会史から，医療サービスの特徴にふれる。一方，日本人の健康や疾病に対する意識や行動について文化人類学，行動科学，統計的手法を用いた保健・医療社会学の解析・把握法を説明する。

内容は，健康増進，疾病に対する個人，集団による健康管理の機能など専門的なものであるが，具体的で身近な問題をわかりやすく講義するので，受講者は新たな視界が広まるであろう。

たとえば，歩行量と成人病との関係，東京都と大阪府の傷病や死因別死亡率，平均寿命の差の原因などに切りこむ。また，地域別自殺率とその社会的背景，都市と農村の死因や死亡率の地域比較分析など，自分の置かれている社会的状況への新しい視点による分析法を講義したい。

〔テキスト〕：佐久間淳著「保健福祉学入門」1993（大修館）
〔参 考 書〕：　〃　「かわる生活環境わかる保健福祉」1995（ミネルヴァ書房）

医 療 人 類 学　　渋 谷 利 雄

病気は私たちの人生に常についてまわる。西欧近代医学は高度に発達し、多くの疾病を直し、寿命を延長してきた。　しかし、依然、私たちは病気からは解放されない。また、

近代医学のゆきづまりも実感されている。非近代的な医療も盛んに行われている。病気とはなにか、健康とはなにか、病気が直るとははにか。各文化の医療行為を見ながら私たちをとりまく医療について再考してみたい。

自由科目（外国語）

上級英語 I　　ロバート・グレイ

This is a one-year course for students who wish to prepare to take objective tests of English such as the TOEIC test. Class work consists of TOEIC exercises, especially listening comprehension, and practice-tests. The classes will be held in the Language Laboratory.

Text : To be announced

上級英語 II (Advanced English II)　　Stephen Martin

This course is an interactive English conversation class for advanced speakers. Topical issues and current affairs are the starting point for information and opinion exchange. In addition, supplementary topics from published articles and books will be presented and discussed. Class preparation will require extensive reading. Assessment is based on communicative participation in class, tasks assigned by the instructor, and attendance.

Text : To be announced

上級独語 I　　重原淳郎

上級に進むには、どうしても中級の段階を経る必要があります。「読む」「聞く」「話す」「書く」の各方面の中級の段階が総合的に勉強できる教材として、本年は次の教科書を使います。大谷弘道 『ドイツ語話しかた教室――表現練習読本』（三修社）

上級独語 II　　神崎　巌

テキスト読解を主とします。テキストは参加者の希望によってきめます。

上級仏語 I　　堀田郷弘

仏語 I と II の単位習得者あるいはそれと同等の知識を備えた者を対象にした上級仏語の講義です。本年度より上級仏語が 2 コマ（I、II）となりましたので、フランス人担当の上級仏語 II と講義内容を分担して、私の担当する「上級仏語 I」は、現代フランス語の読解力を高める訓練を主として、フランス語による自己表現（書きことばとして）の訓練な

どをおこないます。小人数クラスですから、受講の学生それぞれがめざすフランス語習得の目的に応じた指導ができればと考えています。

上 級 仏 語 II フィリップ・ヴァネ

Selon le nombre des étudiants, leur niveau et ce qu'ils veulent faire, nous choisirons un manuel français de niveau II, en insistant sur l'expression orale. Cours en français.

寄附講座開設について

早稲田大学では、教育研究の質的向上・発展に寄与することを目的として学術研究提携等を行っています。

その際、大学の主体性と独自性を堅持するため、次の「ガイドライン」を制定しています。

1. 学問の自由および独立を守ること。
2. 世界の平和および人類の福祉に貢献する研究を行うものとし、軍事研究および軍事開発は行わないこと。
3. 本大学における研究活動の発展および教育の向上に寄与すること。
4. 研究成果の公表を禁止された秘密研究は行わないこと。ただし、研究成果の公表時期に関する研究委託者または共同研究者との信頼関係に基づく合理的制約は、この限りでない。
5. 社会的に公正であること。
6. 関連資料を開示の上、民主的な手続きに基づき、提携等に関する意志決定を行うこと。

また、このガイドラインを正しく運用していくため、大学は、「学術研究提携等審査委員会」を設置して、個々の提携等を審査しています。

以下の寄附講座は、このような学術研究提携等の一環として上記の審査を経て設置されたものです。

人間科学部設置科目

東洋医学の人間科学（井深　大寄附講座）

石田秀美
安藤　治
新井　信
吉川　信
石井康智
春木　豊

西洋医学はその基礎になる科学思想について長い歴史をもち、その上に立って基礎研究及び臨床実践においてめざましい成果を上げてきた。しかし、一方でその限界と、害もささやかれるようになってきた。この問題に対処するものとして、東洋医学に対して東洋のみならず西洋においても関心が高まってきた。

東洋医学の概念はまだ定かではない。したがって、さまざまなものを内包しているが、本講座では、なるべく広範囲に東洋医学に関する基礎知識を学習できるように構成してゆく。基本的には、思想、心理、生理、医学を軸にして、それぞれの分野の専門家に出講していただく。また東洋医学は自らの実践ぬきには考えられないので、実技も含める。なお、本年は上記の講師に出講していただく。

ジェロントロジー《長寿社会の人間学》（高砂殿寄附講座）

嵯峨座晴夫
濱口晴彦
上里一郎
他

演題としては、ジェロントロジー総論、大衆長寿時代の社会学、生涯発達の心理学、長寿社会の生活の質、長寿社会の福祉、長寿社会の経済、高齢者のカウンセリング、ターミナルケアなどを予定している。また、以上の講義以外にオープンレクチャーを3回程度開催する予定である。

なお、授業は次の日程で行う。

第1回　9月20日（土）　13:00〜16:30　ジェロントロジー総論
第2回　9月27日（土）　13:00〜16:30　大衆長寿時代の社会学
第3回　10月11日（土）　13:30〜16:30　長寿社会の経済学
第4回　10月25日（土）　13:30〜17:00　「生きがい」の心理学

第５回　11月 8日（土）　13:30〜17:00　フリートーキング・交流会
第６回　11月22日（土）　13:30〜16:30　長寿社会の福祉
第７回　12月 6日（土）　13:30〜16:30　高齢者のメンタルヘルス
第８回　12月13日（土）　13:30〜17:00　老年期の心理と家族との関係
第９回　 1月17日（土）　13:30〜17:00　死の教育とターミナルケア

現代都市・地域論（早稲田都市計画フォーラム寄附講座）

現代都市・地域論Ａ

担当教員：佐藤滋（理工学部・教授）、浦野正樹（文学部・教授）、店田廣文（人間科学部・教授）、寄本勝美（政治経済学部・教授）、鵜飼信一（商学部・教授）、内田勝一（法学部・教授）、中川義英（理工学部・教授）、後藤春彦（理工学部・教授）

「現代の都市や地域社会が抱える諸問題の考察を踏まえて、自治体と市民とによる自治を基本としたソフト・ハード両面にわたる都市つくり、まちつくりを構想しよう」とする際の、理論と実践の方策を全学の都市地域関連の専任教員により講義する。前期のＡは、基礎理論に関する内容で、現代都市・地域を多面的に分析し、問題の発見から課題の定位、課題解決の方法について、以下に列記する項目に従い、多面的な学問分野から論ずる。

1　都市の調査

- 都市と農村の社会学的調査方法
- 都市づくりと発見的方法
- 産業と地域経営の分析

2　都市に関わる調査・研究・計画課題

- 都市社会の計画課題
- 市民参加の基礎理論
- 都市法学の課題
- 居住環境整備の基礎理論
- 現代都市と土地住宅問題
- 交通問題と行政

現代都市・地域論Ｂ

担当教員：中川義英（理工学部・教授）、戸沼幸市（理工学部・教授）、寄本勝美（政治経済学部・教授）、内田勝一（法学部・教授）、土方正夫（社会科学部・教授）、卯月盛夫（専門学校・教授）、早田宰（社会科学部・助教授）

現代都市・地域論Ａに引き続き、都市つくりの計画と自治行政の実際と可能性を多面的な領域から学ぶ。市民参加のもとでの自治と分権が大きくこの分野を変革しようとしている現代を歴史的な視野でとらえ、第一線での動きと今後の展望、それぞれの職能の役割などについて以下の項目で講義する。

1　現代都市と自治体の行政

- 都市の計画と実現のための自治の枠組み
- 都市の法制の仕組み
- 自治型都市つくりの技術
- 情報化時代の都市の経営
- 都市つくりと財政

2　都市の計画と自治行政

- 都市の計画と実現化のための方策
- 東京の都市計画の歴史
- 国土と大都市圏計画

現代都市・地域論演習A

担当教員：講師　卯月盛夫

現代の都市は、その主役である住民の意志とは全くかけ離れて作られている。都市を再び住民の手に取り戻すためには、“参加型まちづくり”という新しいコンセプトが必要である。そこで本演習は、都市づくりにたずさわる者にとって必要な、住民参加にかかわる新しい計画技術や手法を実際に体験しながら、理論と技術の両面から学ぶことをねらいとしている。演習は、グループワークをともなうので、５グループ程度、合計４０名を限度とする。毎回の演習は次の内容で進むが、それぞれの演習の背景となっている、各学問分野の基礎理論についても講義を行い、レポートが義務づけられる。

１：様々なワークショップの実際について学ぶ。

本演習の導入として、いくつかのワークショップを体験する。ワークショップとは、「ある目的を遂行するためにその場に参加した全員で行う創造的な共同作業」、という意味である。

２：計画者と利用者のすきまをうめるコミュニケーションの手法について学ぶ。

パターンランゲージ、設計者参加の街なみづくりなどの理論と技術を演習する。

３：計画者として、住民参加プログラムの作成とその運営の手法について学ぶ。

デザイン・ゲーム、住民参加キットの開発などを演習する。

現代都市・地域論演習B

担当教員：講師　藤井敏信

「参加型まちつくり」は都市づくりのキー概念といえるが、本演習ではその過程で展開される生活環境上のさまざまな課題を多角的にとりあげ実地調査から、計画策定、その実

現化の方策の検討方法などを演習する。具体的な地区を設定し都市地域づくりの前提となる、問題と課題の発見と分析、課題解決のための方法について、多面的な学問領域の成果をふまえ、さまざまな方法で演習する。

各界、それぞれの分野の専門家をゲスト指導者としてお招きし、演習を進める。計画のプロセスを一通り学ぶため、講義時間外での各種の課題や予習などが義務づけられている。演習は次の３つの段階に従い進める。

1．計画条件の読み取り整理の方法

演習の対象として設定された地区をさまざまな手法で現地調査し、地区の条件の読みとり、地域社会の解析など、計画の前提条件の整理方法について演習する。

2．企画構想の立案と計画案の検討

現地調査で得られた結果をもとに、課題解決のための目標の設定と表現の方法、現実化の方策の検討、計画の影響事前評価の方法について演習する。

3．実現化のための方策の検討

具体的に検討された計画を実行するに当たって、行政、市民、民間の役割と関係、また法制度等の具体的な適応などについて既存の事例の評価をとおして演習する。

メディアネットワークセンター設置科目（全学共通科目）

メディアネットワークセンターでは、全学部・大学院生を対象にコンピュータ関連科目を設置・開講している。これらメディアネットワークセンター設置の科目の内容および手続き等については、センターが発行している登録要項を参照・熟読のこと。

１９９７年度早稲田／オレゴン夏期プログラム

科目名：Japanese and American Societies

テーマ科目：Tradition and Innovation

All students are required to take English and one or two out of three courses (The Arts, Economics, Culture and Society); mandatory participation in weekly "Colloquium", conducted by all language and theme course faculty.

The Arts

In this course we will look at the history and theory of tradition and innovation in Japanese and Western arts - drama, the fine arts, poetry - concentrating especially on the interesting ways in which, since the 19th century, Japanese and Western traditions have influenced one another, so that what can appear most traditional within Japan can appear most innovative in the West, and vice versa. At the same time, in order to take advantage of the unique opportunities offered by the program, students will participate in the process of reinterpreting tradition by creating original work.

This course will focus especially on the drama and the haiku. Traditional Japanese drama and the haiku have held a powerful attraction for avant-garde artistic circles in the West, especially in the United States, but this influence has been connected to a widespread crisis in the artistic and literary traditions of the West. At the same time, traditional genres have been profoundly altered or reinterpreted in order to survive in modern Japan. In this process, the example and influence of Western arts have been decisive. In the class, this history will be discussed with reference to a variety of texts; students will also form groups and write and stage their own English versions of the traditional genre of kyogen. In this way they will directly experience the pleasures and difficulties of appropriating tradition. This course will also look at the modern reception and influence of Shakespeare's 'Hamlet' in Japan and the West, as an example of the influence and reinterpretation of traditional Western drama.

Students will participate in a haiku workshop, where they will, under the guidance of a leading American English haiku poet, compose original haiku in English. One or two speakers will also be invited to talk about related topics. On the basis of these experiences of creative work, students will then return to the more theoretical question of the conceptualization of tradition and innovation in the arts.

Students will be required to write three one-page papers on assigned topics during the course. They will have the option of either participating in the composition and creation of a kyogen or of converting one of the three papers in

to a longer essay. The final performances of the kyogen will take place in the evening of the final Thursday of the course. A wide range of materials - texts, videos, films, etc. - will be used in the class.

担当教員
Laurence R. Kominz Professor, Department of Foreign Languages and Literature, Portland State University (Tradition Japanese drama)
A.J. ピニングトン　早稲田大学法学部助教授（比較文学）

Economics

Between Innovation and Tradition: The Economies of Japan and the United State

The U.S. and Japanese economies have evolved in a dialogue with national political and social changes. No doubt, these national economies have experienced the tension between tradition and innovation for centuries. In today's era of economic globalization, national economies, companies and workers are confronted with the demand to innovate in order to stay competitive on the world market. This course examines this process by exploring the impact of the pull between innovation and tradition as it relates to company structure, management organization, labor issues, government involvement, international trade strategies and gender issues.
The course will shed light on the commonalities and differences of how the Japanese and U.S.economies try to come to terms with these changing economic conditions.

At the same time an emphasis is put on the interrelationship between the U.S and Japanese economies as they try to preserve traditions while digesting powerful technological innovations. It is hoped that students will learn how the world of today is a global system of mutual interdependencies in which innovations permeate all economies. By the end of the course students should be able to see behind simplistic popular economic stereotypes and develop an appreciation how the tensions between preserving national values and digesting international economic innovations effect on everyone's life.

Two required books will help the students to deepen their understanding of the complexities of this issue :

Harold Vetter, THE U.S.ECONOMY AFTER WORLD WAR II, New York 1996
J.C. Abegglen and G.Stalk, KAISHA-THE JAPANESE CORPORATION, Basic Books, 1985

The grade of the course is based on a mid-term in class examination (40%), a five-page research paper(50%) and one oral class presentation (10%).

担当教員
Friedrich E. Schuler　Associate Professor of History and International Studies, Portland State University (History, Foreign Relations)

鈴木宏昌　　早稲田大学商学部教授（労働経済）

Culture and Society

Japan and U.S. stand united as the two twentieth century nations most driven by the urge to innovate. Innovation has been commonly recognized as the most fundamental motivational force to secure economic prosperity and propel social advancement, and thus the make-up of an advanced society is closely associated with innovation. Although both Japan and the U.S., as the two major economic powers, have an assimilated value disposition to support innovation, each nation also exhibits a particular kind of allegiance to tradition.

The different kinds of allegiance to tradition seem to have resulted from the different cultural contexts of each nation's social and political systems. Politics, contrary to economics, constantly seeks to situate new innovations securely in the embrace of real or imagined heritage. Traditional values are introduced to stabilize social relationship between organizations as well as individual persons. In the social fabric, therefore, the forces of tradition and innovation may be seen as complementary or antagonistic or confusingly intertwined.

The question we should primarily be concerned with in this course is the people's consciousness of the complementary and conflicting relationship of tradition and innovation in each of the nations. The social and cultural forces of tradition and innovation will be examined in terms of domestic and international manifestations of paternalism. Paternalism has been but one of the shared socio-cultural characteristics of Japan and the United States in their twentieth century emergence as global avatars of innovation. The emperor, the ie system, administrative guidance, and corporate authoritarianism instantly conjure up for the Japanese comfortable images of benign paternal guidance. Uncle Sam, the Founding Fathers, George Washington, Honest Abe, and FDR evoke comparable images in America. Paternalism is a social outlook that has its origin in the patriarchy of the pre-modern tradition,
somehow has not thwarted the impetus toward change, an inventive surge the world has come to envy and to fear.

The Culture and Society Course examines paternalism as a means of understanding
similarities and differences in the two cultures and societies. Two dimensions-the domestic and the international - will undergird this examination throughout the course. On the domestic side we shall study American and Japanese social structures and how the paternalism evident in each manifests itself in very different ways both
historically and in contemporary affairs. The same exercise will apply to the international sphere, here specifically referring to the extension beyond the borders of our countries musually unique paternalism.

The course will include short lectures, discussion, small group activities, guest lectures, and field trips; student projects will be presented during the last week

of the program. The topics to be covered include:

Structural differences in Japanese and American Societies
Paternalism and Change in American and Japanese Traditions
Japanese Management and Its Ideological Roots in Paternalism
Catch-up Modernization vs. Leading Modernization
Deference vs. Authority, Benevolence vs. Human Rights; 'Collectivism' vs. Individualism
Paternalism in Education; Religion; Generation Gaps; Gender
The Faces of American and Japanese Abroad
The Vietnam War; Oil; The United Nations
Greater East Asia Co-Prosperity Sphere; Pax Nipponica; ASEAN

Instructors

担当教員

Roger Paget Professor, Political Economy and Asian Studies, Lewis & ClarkCollege
(Government and Asian Studies)

和田修一 早稲田大学文学部教授（社会学）

Colloquium

The weekly, two-hour long colloquium provides and opportunity for all students and faculty to address the theme, "Tradition and Innovation", together. It is intended to be an interdisciplinary forum which will begin with a presentation of multi-media collages made up of raw materials collected during the non-Waseda students' four week stay in Japan. Comments by the six theme faculty will be followed by discussion by all present. During the second and third colloquia summer program faculty and guests will focus on two sub-themes--"Exoticism, Tradition, and Innovation" and "Tradition, Innovation, and Human Rights". The fourth and last colloquium will provide an opportunity for Waseda students to engage in an activity analogous to that of the non-Waseda students in the first colloquium. That is, they will collect and record their images and impressions of Americans' perceptions of Japan and present their multi-media collages which will be followed by faculty comments and discussion.

English

A primary goal of the English course is to enhance students' ability to express their ideas and opinions in English and to build self-confidence in their language skills, English language faculty will work in conjunction with theme course faculty to prepare students to understand theme readings and lectures as well as to complete their final projects. Students will develop the skills needed to participate in discussions and projects with fellow students and faculty, focusing on the most significant concepts and themes of the program. Emphasis will be on listening comprehension and note-taking, debate and discussion techniques, academic writing, reading strategies, pronunciation and vocabulary development. Students will be required to keep a journal in which they reflect on their theme course readings and discussions as well as on their

cross-cultural experiences.

The English course will be divided into four levels based on prior assessment of language skills. The pace of each level and the specific activities will be determined by the needs of the students.

担当教員

John Armbrust	Instructor, Center for English as a Second Language, Portland State University
Jane Davis	Instructor, Tokyo International University of America
Gary Fallow	Faculty, English as a Second Language Institute, Oregon State University
Craig Machado	Faculty, English as a Second Language Institute, Oregon State University

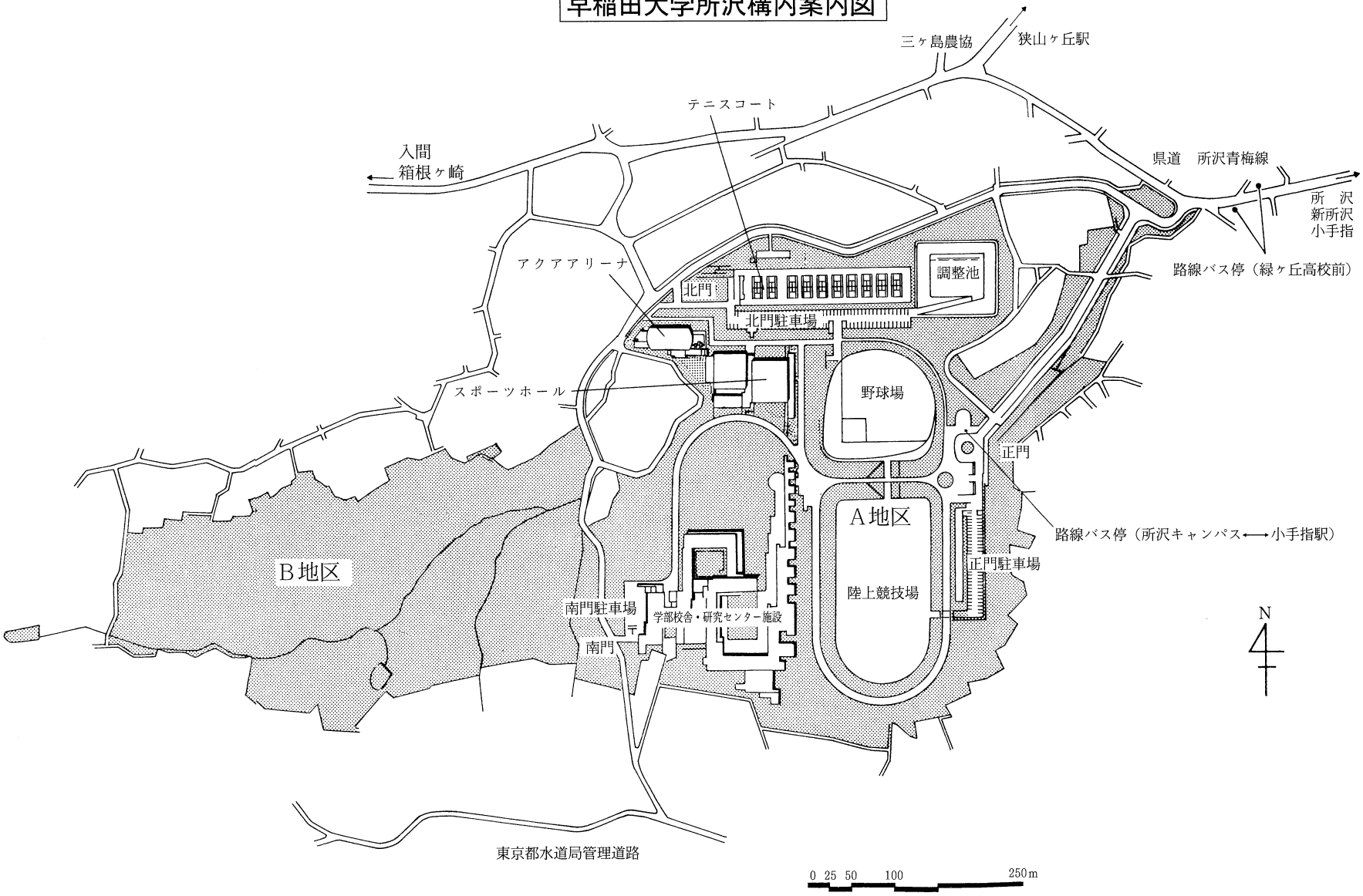
役職教職員一覧

学部長	濱口晴彦
教務主任（教務担当）	蔵持不三也
教務主任（学生担当）	加藤清忠
教務副主任（教務担当）	鈴木秀次
教務副主任（学生担当）	谷川章雄
人間基礎科学科主任	木村一郎
人間健康科学科主任	野嶋栄一郎
スポーツ科学科主任	山崎勝男
事務長	関谷武彦
図書課長	馬場静子

建物・号館案内

100号館	8階	研究室
	7階	研究室
	6階	研究室　人間総合研究センター所長室　実験室　会議室
	5階	研究室　会議室　実験室　学生実験室　面接室　観察室　暗室 測定機室　工作室
	4階	学部・大学院事務所　学部長室　教務主任・副主任室・教員ラウンジ 所沢図書館・事務室・会議室　健康管理センター（所沢分室） 研究室　実験室　学生実習室　教職員食堂　教育工学室
	3階	演習室　埋蔵文化財展示室・整理室　学生ラウンジ 学生共同利用室　コピー室　学生食堂　売店　就職資料室 メディアネットワークセンター分室事務室　端末室 労務員・清掃員室
	2階	60人教室　350人教室　700人教室　演習室　視聴覚教室　LL教室
	1階	60人教室　140人教室　200人教室　学生ラウンジ 守衛室

早稲田大学所沢構内案内図



史學